

41780

教科書文庫

4
810
41-1923
200030 2014

Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

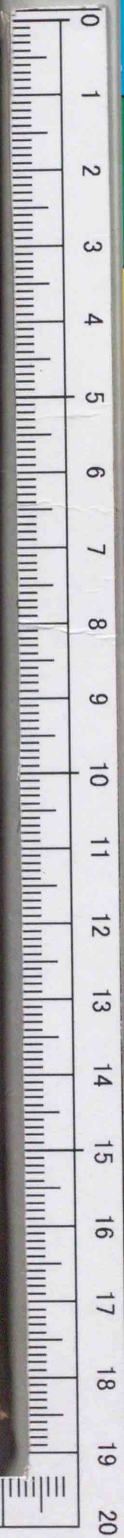


© Kodak, 2007 TM: Kodak

Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak



教科書文庫
4
810
41-1923
2000302014

版五十正修

平彌田吉

編

學中

國文教科書卷六

京東

版藏館風光



文部省檢定
大正二十一年十一月十六日
中國國語教科書

教科書文庫
4
810
41-1923
2000302014

資料室

375.9
Y019

吉田彌平編

中國文教科書

東京 光風館藏版

広島大学図書

2000302014



廣島大學圖書部
昭和二十一年十一月二十七日

吉田藤平蔵

廣島大學圖書部



東京 廣島大學圖書部

中國文教科書 卷六

目次

一 平安京	藤岡作太郎	一頁
二 忘れ難き日	姊崎嘲風	七
三 友に寄す	高山樗牛	三
四 思想生活	厨川白村	九
五 北漢山に上る	徳富蘇峰	三五
六 西湖の遊	河東碧梧桐	三
七 仁和寺の法師	兼好法師	四〇

目次

八	佐那田餘一その一	四
九	佐那田餘一その二	五〇
一〇	膽力	嘉納治五郎 五七
一一	血氣	吉田松陰 六四
一二	相模灘の落日	徳富健次郎 七〇
一三	吉野の宮	北畠親房 七〇
一四	如意輪堂	七六
一五	空中戦その一	菊池 寛 八二
一六	空中戦その二	菊池 寛 八六
一七	空中戦その三	菊池 寛 九〇
一八	見よや春	渡邊崋山 九六

一九	鶯	島崎藤村 一〇六
二〇	雪前雪後	幸田露伴 一一九
二一	自然の愛好	藤岡作太郎 一二五
二二	故郷の花	一三三
二三	平重盛論その一	高山樗牛 一三六
二四	平重盛論その二	高山樗牛 一四二
二五	皇國の姿	一四九
二六	國民の抱負	大西 祝 一五七

目次終



中學國文教科書卷六

藤岡作太郎

號ハ東國
國文學者
文學博士
東京帝國大學文
科大學助教授
明治四十三年歿
年四十一

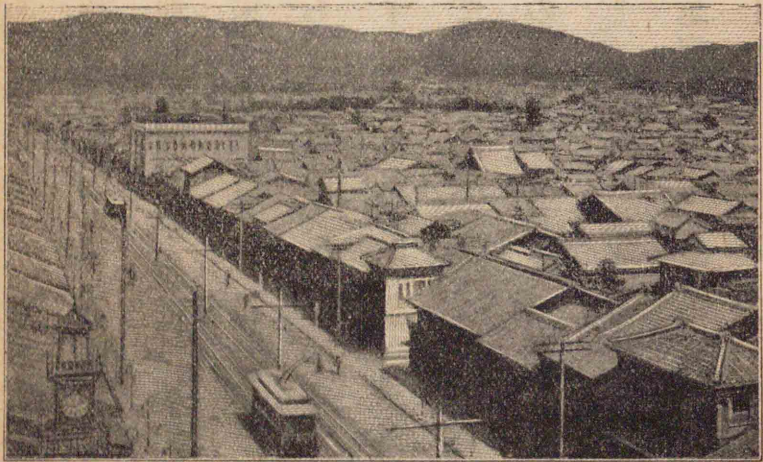
一 平安京

藤岡作太郎

日本は世界の樂土なり、東亞の伊太利なり、山川の風景往くところとして佳ならざるなきが中に、殊に衆美を鍾め、群を抜いて立てるを京都とす。京都附近の景は日本のすべてをエキスにしたるもの、規模の雄大豪壯なるものは存せずといへども、曄麗幽婉の形態は備らざるなし。東に近く比叡如意が嶽より三の峰まで、東山三十六峰笑ふが如く、

四明が嶽
比叡山ノ頂

北には鞍馬・貴船・氷室・鷹が峰・高尾の山々波濤の如く、西にや
や隔りて愛宕・小倉・龜山・嵐山・松尾より山崎に至りて地勢は
窮る。松柏の緑、色濃きなかに、或は目覺むるやうなる櫻の
入り交るあり、或は紅燃ゆる紅葉を織込みたるあり。一面
の草の頂なる四明が嶽、春なほ雪白き比良の遠山などは、わ
けて朝日夕日に照りはゆる色の千變萬化なるぞ面白き。
東の神樂が岡、西の雙が岡は、大和の畝傍・香山・耳無の三山の
如く近く相並びてあらねば、妻争ひの口碑も傳はらねど、子
の日の遊に小松引く樂みなど、いづれ劣らぬところから。
南にや、隔りて男山これに對すれど、國家鎮護の八幡宮、宮
柱太知りまして、仰ぐも畏し。



四條通から見た東山

京の東端に沿うて、鴨河の流
糺の河合に高野の支流を集
めて、南に珠を碎き去り、西に
少し離れて桂川、大堰の激湍
に清瀧を併せて、琴の音涼し
く又南に向ふ。二河南に合
し、更に淀の急流に流れ込み
て、沈々として西の方難波を
さして走る。
茫洋たる大海、浩蕩たる波濤
の壯觀なく、跌宕の觀念を人

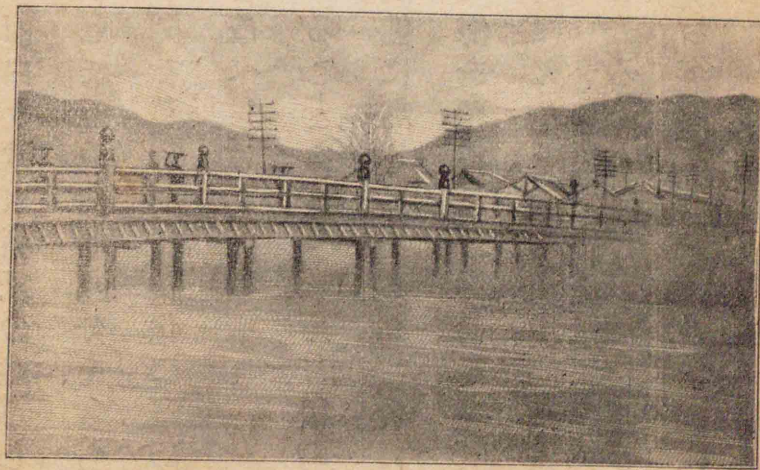
心に與ふるものなしといへども、一面よりいへば、山の内に籠りて海を見ざるは、またそれだけの長所なくんばあらず。地勢の勾配稍急なれば、蘆間に出で入る白帆の、町の側を往來する眺なきかはりに、濁りて底の明かならざる河水を知らず。京の水はわけてアルカリ性の鑛物を含めるにや、晒す布をも人の膚をも眞白にす。海そのものは清けれど、棄てたる塵埃を更に岸に打上ぐるに、藻の臭も添ひ、漁夫などの居る處は、わけて見るにも嗅ぐにも心地よからぬこと多し。京都に海なきは惜むべしといへども、海なくして清き京都は益、その清さを加ふるなり。

山紫水明の語はよく京都の景色をいひ表せり。何處の山

水も、日中よりは朝夕の姿態の面白きは、水蒸氣の然らしむる處なるを知らば、三面を山にして土地濕潤、水分を含むこと殊に濃やかなる京都の朝な夕なが、いかに變化に富めるかは、説明を須ひずとも明かなるべし。

嘗て一夏を北陸の海岸に送れることありき。一日驟雨の至るを見る。疾風さと吹き、浪俄に高く、黒雲奔りて魔の如く、見るがうちに重なりくくして海を覆ふ。波の音は雲の中にあり、電光閃々、磨る墨の雲間に火花を散らす。波か、雷か。世界はたゞ一暗黒の中に没し去るかと思はれて凄じかりき。かくの如く壯絶なる景は、わが數年の滯留の中遂に京都にては見ることを得ず。されど下京より吉田に通ひた

る朝な〜の景色は、今に恍
惚として眼前にあるを覺ゆ。
ひき渡す霞に、三條の大橋の
擬寶珠の一つ〜彼方へ彼
方へと淡くなりて、向ふに寐
たる東山は有るか無きかの
夢より未だ覺めやらず。吉
田の岡に並び立てる松は墨
繪の刷毛の濃く淡く、花賣る
少女の姿は隠れて、聲ぞまづ
朝靄を漏れ來る。



橋 大 條 三 都 京

時雨の景色のまたよその國には見られぬ様よ。愛宕の峰
を覆ひて白く光りたる薄布の、さては時雨と思ふうちに、は
らはらと面を撲つ、あはやと驚きも果てず、雲は走りて直に
東山を包み、いつしかそれも霽れて、今は山科あたりの山巡
りするなるべし。かゝるやさしき景色は、山河襟帶の平安
京の特色なり。(國文學全史)

二 忘れ難き日

姉崎 嘲風

嗚呼、忘れ難き此の日かな。思へばはや五年の昔、春光麗か
に南風薫ずる日、友に擁せられて家を辭し、故國に別れしは
恰も今日の此の日なりき。帽を振れる客、巾を翻せる友、船

姉崎嘲風
名ハ正治
宗教學者
文學博士
東京帝國大學教
授
明治五年生
友
高山樗牛

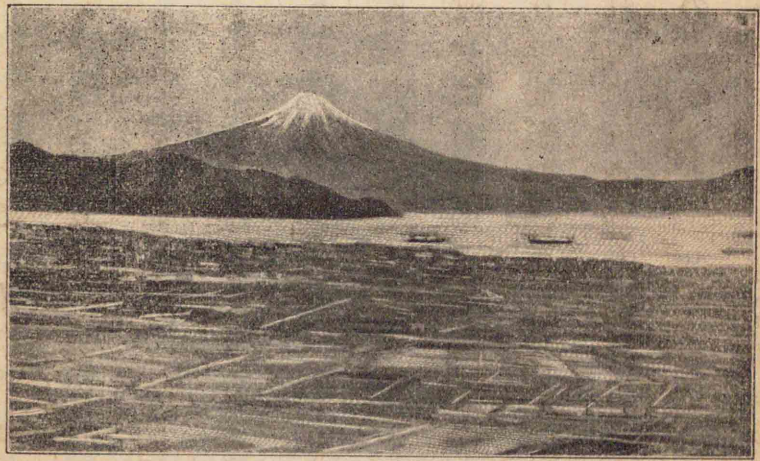
三月
明治三十三年

上艇中相隔りては面も定かならず、姿も終には見分かぬ迄に消え失せぬ。「健在なれ」「再び早く相見ん」との別の言葉は尙耳に響き、最後の握手今尙掌に感ぜられつゝも、見わたせば白鷗飛びかふ海の面渺として、埠頭の家屋、故國の山河、已に霞の中に入りなき。嗚呼、かくて相別れたる我が友、今何處にかある。彼はその夜、西の方足柄を過ぎて清見潟のほとりにさすらひ來り、恰も此の海樓に宿りて離別の悶を遣りしなり。月は去り日は逝きて五年後の今日、此の日、我は來りて此の海樓にあれど、彼は既に世を謝して復相見んに由なく、我をして孤影蕭然欄に憑りて無限の感に沈ましむ。三月君が西航の首途を横濱に送りたる日、予は西の方函

嶺を踰えて駿州に入り、清見潟の海樓に宿りて離別の悶を遣りたりき。其の夜月明かに星稀に、一灣の風光恍として夢の如し。中宵欄に憑りて靜に君を思ひ、うたゝ人生遭逢のはかなきを歎きぬ。

人生遭逢のいともはかなきを歎じたる彼、今や我を此の世に残し、獨り我をして離合の泡沫に似たるを歎かしむ。見渡せば有渡の山影かすかにして、袖師の松原、雨におぼろなり。彼が埋骨の地、彼が夢遊の山川、すべて暗澹の中に包まれて、海面亦死せるが如し。此の海、此の地、是、彼が久戀懷慕の處なりき。此の夜、此の風光、是、彼が銷魂の種たりしこと幾度ぞ。山海舊の如く、風光昔の儘にして、彼が友は已に歸

有渡の山
静岡縣安倍郡久能山ノ別稱
袖師の松原
三保松原ノ一部
埋骨の地
静岡縣安倍郡不二見村龍華寺



龍華寺か見らた富士山

り來つれど、彼と其の姿とは
今や尋ぬるに由なし。昨は
彼が墓邊の櫻花散りかゝる
寒水石の碑を撫で、今夜、五年
前の今日の別離を偲んで彼
が遺文に對す。嗚呼、我此の
流轉の世に處し、此の友なく
して如何にしてか憂懷を遣
らん。
されど徒に憂ふるを已めよ、
人に百歳の齡なく、世に別離

なき人はあらし。生死は世の常なり。別離は却て懷慕の
樂みを深からしめ、懷慕は時と處との隔を越えて神相接せ
しむ。友此處にあり、悠久の夜亦こゝにあり、彼が遺文餘薰
新にして、我が思慕日毎に彼に通ず。清見灣頭今宵雨しめ
やかにして夜靜かなり。形は見えねど彼は我と語り、我は
彼に接し、松風濤聲亦時に款晤に入り來る。嗚呼、平生憂を
同じうせる君と予と、先世何の契縁かある。身世匆忙とし
て相移り、際遇已に相異なり、生死幽明相隔つと雖も、彼と我
と長へに相伴はん。
歲月水と流れ去つて五年の昔を今に返す由なけれども、神
相接しては生死路相隔てず。三世一心の中に融け來つて

は、彼も我も人相異ならず、靈相同じ。人里には燈火已に影を收め、清見瀉の山海亦眠らんとす。雨よ降れ、夜よ暗かれ、有渡山下、友の墓邊に風靜かなれ。而して我は此處に我が友と相語りつゝ、今宵一夜の眠に入らん。(停雲集)

三 友に寄す

高山樗牛

如何所暮しあそまよや此方お夜更らず
碓氷霧在の間餘事なごう御安心下さ
ればよ此頃を事に終れば此と無沙汰なり

高山樗牛
名ハ林次郎
評論家
文學博士
明治三十五年歿
年三十二

打過ぎぬ毎度勝手の事のみ御頼こ
申上げ此面倒家入候徒然の折に各
物ほきまゝ色々註文中上らばとも實
際手にとるは稀には座の水彩畫にて
之描きみんとて先頃繪具など取寄さし
つゝも是までも手に罷まざる願はば我な
らば僅しくも暮らしては思ふに
つゝも是れも一ちなかに樂しく過し

中修

小生の室は熱海中より最も眺望よき處
 より魚見崎より真鶴崎まで雙眸の裏
 に葦原の朝日影をく入る頃又起き出で
 九時頃より濱邊など散歩致し午後は
 園甚大う葦に費すが毎これ例より時ふ
 を一巻のハイネ集を携へて山腹の芝原
 に仰臥し大海の浩蕩を對して朗吟する

魚見崎
 熱海町ノ南端ニ
 アル岬
 真鶴崎
 神奈川県足柄下
 郡ニアル岬
 熱海ノ東北三里
 餘

ハイネ
 獨逸ノ詩人
 (1877-1886)

くとも此座の或ハ日暮の空ひとり磯邊の
 松に腰おたむしむる夢ともなく現とてなき思
 に耽ることもこれあり修げや自然の無盡
 藏なる今は大勢わたりたりに此座を修
 我も人そ自然くこと口にこそは言へ幾人
 か其の真意を會得まつらや天の響地の
 響思ひ見るたよ高く深く修へどもそれ感
 ずる人の心は如何ばかり高く深きその大候

つまやうく夕日影も名残なく暮まき果て、
 渾火ほの見ゆる頃ふ相成候つばせんとくくの
 波音のみ高く相成り水と空とれ別も消えて
 天地を一つにならむとんと思はるゝとる夜
 と眠のたぬに造らむとるものにあらすとの
 詩人此言葉の今更ふ思ひ出でられ候
 去年の暮より二三日前までは月色殊の外
 めづたくあがず夜をふのしく打眺る申候

元日の夜も十七夜なりしゆ五月の海を出
 つら頂小生の宿に世川姉崎大橋慈谷の
 諸氏と共ふ觀月のふ宴を張り申候ひき
 一昨四日の夜九時頃も候ひん抹り
 就のんとてはさす宮の間より海邊をな
 がめれば缺月ながら一間さのり海と離き言
 ふとくうながめたりき景色もそひり
 かね下女に命じり雨戸をあきさせ欄り

よりてハイネを朗吟致す其時の心地よき
あはまわねのまろ石も金にもなれかしと
思ふれひひき

貴兄芽はさるかし日々御勉学の由事ふ
らんと羨まき申す時より御文賜ひひ
うし病氣も大方を宣し〜の間御心配下
さるまじ〜候申上げたき事山〜と
ありひ〜をまつ〜れ〜筆をとめ候

(樗牛全集)

厨川白村
名ハ辰夫
英文學者
文學博士
京都帝國大學教
授
明治十三年生

四 思想生活

厨川白村

窒扶斯菌が人體を侵す。すると其の人の肉體の生活力が
此の邪魔物にぶつつかつて戦ふ。戦ふところに熱を發す
る。だから生活力の強い人ほど此の熱が高くて、その結果
體質の強健な者が却て多く命を取られる。本當か嘘かは
知らないが、私はいつかそんな話を聞いた。そして面白い
と思つた。

生命力の旺盛な人が或問題にぶつつかる。問題は即ち生
の躍進の途上に横たはれる邪魔物である。生命力が此の
邪魔物と衝突するところに發する熱が即ち思想である。

生命力の強い人が、此の思想の爲に礎にされたり、火あぶりにされたりして命を棄てた例は甚だ多い。そして此の思想が更に火花を散らしたり、美しい花を咲かせたりする所に、文學は生れ、藝術は育てられる。

だから、生命力の貧弱な者には深い思想生活はない。思想の深くない所に、大きな文學や大きな藝術が如何にして生れよう。わづか一分か二分の土を盛つた植木鉢に、大きな美しい花の咲かう筈が無いではないか。

晩秋の或夕暮、岡崎公園に帝展の作品を見ての歸り、私の書齋を音づれた或友人がさう云つた。「今の日本に出来る最高の藝術が、唯あれだけの物かと思ふと情なくなる。」私は

答へた、「いくら情なくつても、植木鉢に土が足りないのだから仕方がない。そして多く深く培はうとする者は誰一人居ないではないか。たとひ居たつて、そんな馬鹿者を相手にしない」と云ふのが、今の日本人の生活ではないか。上すべりの利口者ばかりが多くて。」

單に文學や藝術ばかりではない。今日では、政治や外交も昔のやうに事務や駈引ではないと云ふ所まで進んだのが世界の大勢だ。労働問題は工場法などでは解決が附かず、國際聯盟は外交文書の往復だけでは濟まなくなつてゐる。文化生活の一切の活動は思想生活そのものを土臺にしてゐるからだ。日露戦争前後までの日本の外交を拙だと云

つて非難したのは其の時々の日本の新聞紙ばかりで、私たちは屢々外國の批評家が以前の日本外交の巧妙を稱讚してゐるのを見た。さうだ、巧妙であつたのは駈引であり、敏捷であつたのは事務に過ぎなかつたからだ。例の小利口者の小手先の器用が可なり効を奏してゐたからだ。今度の講和會議の結果を見て、日本人が宣傳運動に拙だつたからだと評した人もあるが、宣傳する前にまづ宣傳すべき思想を吟味するが大切ではないか。公衆の前に長廣舌を弄するなどは惡徳だと心得たのが日本の習慣であつた。何しろ幾百年來、口は禍の門だと心得て生活して來た日本人である。その結果として第一に日

本語そのものからして、公開演説の言葉としては十分に發達してゐない。この點では世界で最も多く民權自由を重んじたアングロサクソン人種の國語が一番發達してゐる。ゼントルマンを養成しようと云ふ昔風のケンブリッジ・オクスフォードなどの大學が、最も大切な訓練として行つたものは討論であつた。日本では思想發表の爲の演説や文章を主要な課目として取扱ふ學校が、過去にも現在にも果してあるであらうか。物は必要のない所に發達はしない。日本語が演説に適せず、日本に雄辯家が少いのは、その必要が無かつたからだ。英語などに較べると此の點は實に恥かしいと思ふ。

日本語そのものが既に此の點で改造を要するのである。其の日本語を使つてゐる日本人に、巴里の眞中などへ行つて外國語で宣傳運動をやれと云つたつて、それはやれと云ふ者の方が無理かも知れない。思想は財布と反對で、外へ出せば出すほど中味は豊富になる。發表しないでゐると源泉が涸渇して了ふ。この點から見ても日本人の思想生活は貧弱ならざるを得ないではないか。

日本人が本當の意味での讀書をしない事も、思想生活の貧弱を一原因だらう。讀書は物識りになる爲などと思つてゐるやうな事ではとても駄目だ。なぜ文學書のやうな無

用の書を多く讀まないだらうか。(象牙の塔を出て)

五 北漢山に上る

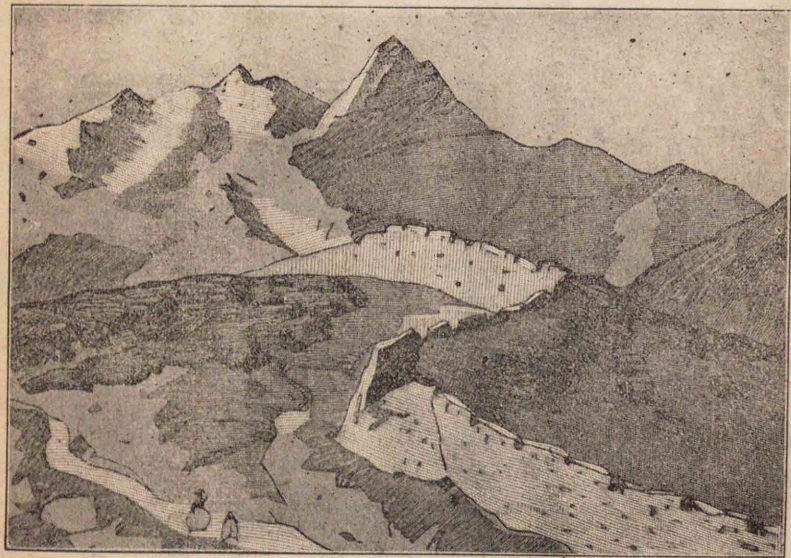
徳富蘇峰

徳富蘇峰
名ハ猪一郎
國民新聞社長
貴族院議員
文久三年生
十月十五日
明治四十四年

十月十五日は日曜なり、好天氣なり、愛吾廬の二冠者を拉へて近郊に遊ぶ。太郎冠者、次郎冠者曰く、北漢山の麓を廻る、風景甚だ好し。予常に南山の下、倭城臺より京城を俯瞰する毎に、三峰兀嶺、石骨筍の如く天を刺すを見て、其の山の奇絶なるを驚嘆せずんばあらず。蓋し奇山は險山なり、予容易に登臨の勇氣を出すを肯ぜず。されど其の周圍を巡るに到りては、欣然として同意せざるを得ず。乃ち發す。烏打帽頭上にあり、紐靴足にあり、愛玩の杖は手にあり。一

朝鮮人に負はしむるに、行厨、菓物、平野水を以てす。時に午前十時四十分なり。

義州街道よりす。路は愛吾廬と常に相對する仁王山の左麓を貫いて行く。天は紺青の色をなし、山は沈鐵の如し。其の分界の截然たる、如何に瀨氣の清澄なるかを察すべきなり。路傍の村店、牛骨を薪の如く積み、牛頭を並べ販ぐ。死牛の頭、動もすれば活ける吾が黨の士を却走せしめんとす。稻田半ば收穫し、白菜漸く肥えたり。屋根となく、地となく、唐辛子を乾さるるなく、宛も紅雪を敷くに似たり。水邊老柳あり、溪間老松あり。而して道、義州街道より右折すれば、岡陵起伏、松林愈多し。その間に漆樹の紅葉錦を晒



北 漢 山 (兩京去留志に よる)

し、路傍の野菊、純白なるもの、水色なるもの、特にその黄金色にして、小輪香氣あるもの、最も愛するに堪へたり。小蛇は力なく暄を負うて途上に匍匐し、雉は驀然として脚下三尺の邊より驚起して翔る。一路の秋光、詩境ならざるはなし。然も未だ北漢山を見ざ

るなり。
 幾回となく上りては下り、下りては上る。小渠目高遊ぎ、埃樹喜鵲群り飛ぶ。乍ち一峰の天際に巨人の鐵兜を被りたるが如きを見る。これ即ち北漢三峰中の一峰なり。此に於て太郎冠者次郎冠者齊しく口を揃へて曰く、麓を廻る路は既に盡きたり。是よりは此の道を辿りて登山するか、さなくば來路に引返すの外なし。と。予今にして彼等に一杯食はせられたるを覺れども、事既に晚し。乃ち意を決して進む。足趾稍、仰ぎ、石徑漸く微なり。
 第一壁門たる大西門の樓上より見わたせば、漢江は既に縹渺の裡にあり。此より澗邊に沿うて進む。秋水鏡の如く、

水底の鯨魚數ふべし。滿山石ならざるはなく、石上蔦紅葉ならざるはなし。而して石上小土あれば、矮小なる楓樹叢生す。之を遠望すれば、蔦も楓樹も殆ど區別すべからず。唯一碧の天と鐵色の巉巖と清湍の白と、その深紅淺紅、或は琥珀色をなし、或は桃花色をなし、光琳も抱一も殆ど筆を投ずる葛や楓樹と相映帶す。栗鼠は無心に石上に戯れ、幽禽は人に近づきて和鳴す。洞雲深き處、仙境を現出するに至りては、殆ど此の身の詩化するを覺ゆるなり。既に第二の壁門を過ぐれば、路愈、險仄を加ふ。さきに仰ぎ見たる巨人の鐵兜峰は既に我が脚下にあり。此に於て身は漸く最高峰に近づきたるを知る。更に勇を鼓して進み、第三壁門に

光琳
 尾形氏
 畫家
 享保元年(三三〇)
 歿
 抱一
 年六十二
 酒井氏
 畫家
 文政十一年(二四)
 歿
 年六十八

抵る。我をして氣息の奄々たるを忘れしむるもの、只滿眼の紅葉あるが爲のみ。

眼界頓に開く。蓋し第三壁門は絶頂の壁門なり、即ち京城に面したる壁門なり、北漢山の表門なり。吾等は其の麓を廻り、山の裏面よりして攀上りたるなり。今や身は分水脈の點にあり。時計を見れば既に四時を過ぐ。十一時前二十分、家を出でてより、荊を敷いて搏飯を喫したる外、殆ど息をもつがず歩行したり。今や此の濶遠なる光景に對す。須く平野水を滿引すべきなり。

漢江は帶の如く、南山は髻に似たり。而して脚底の連山は波濤の如く、花崗岩の蝕解したる白沙は宛も白雪千峰に滿つ趣あり。偶朝鮮人の市に鬻がんが爲に、紅葉を折り來りて背上に堆きを見る。之を要してその幾枝を買ふ。仍つて同人相促して歸途に就く。下路の艱は上路に過ぐるこゝと十倍。その扁仄にして劍鋸の如き石角を踏み、纔に急雨の降下したる流跡を辿りて行く。韓退之の所謂山石犖确行徑微の一句も之に加ふる能はず。

下りて洗劍亭に到れば、暝色纔に咫尺を辨ずべく、行いて石坡亭の前を過れば、亭内の紅葉、夜の幕に鎖さる。進んで北門を望めば、京城は星火點々の中にあり。愛吾廬に歸れば、既に七時。予は自ら疲勞を訴へざれども、愛杖の下半は傷痕斑々たり。然も彼此乗除すれば、吾が家の冠者輩に致さ

れたるを感謝せざるを得ず。(兩京去留志)

六 西湖の遊

河東碧梧桐

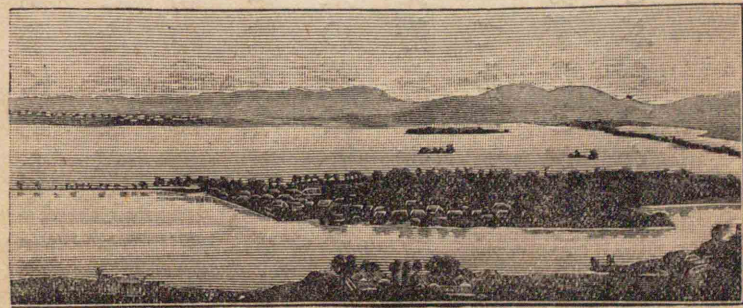
河東碧梧桐
名八乘五郎
併人
明治五年生
杭州
支那浙江省杭州府

杭州に下車して晝飯を済して後、すぐ洋車を吳山の麓まで
驅つた。きたない狭い民家の間から上り始めて少し小高
い丘の上に出ると、そこに杭州城を半圓に遠く巻いた錢塘
江の眺望があつた。風も吹かないので、爽快な、すつきりし
た氣持になつて、始めて足下にたゞ白壁を塗り重ねたとし
か見えない杭州城内の建築と、吳山の一角の出張つた山の
磊塊とした岩石との配合が、錢塘江の水を待つて、一幅の男
性的な油繪になる構圖に興を催すのであつた。日本から

渡つた鐘を吊つてゐる寺や、四五臺の轎子に釣られて來た
身分のありさうな女連れの寺參りなどを見ながら、なほ四
五町も上ると、今度は右に雷峰塔と西湖の東南の一部とを
見おろす眺望に逢着した。西湖の中には大小二つの島が
ある。それが正しい圓さである上に、葉の茂つた柳でぐる
つと水を區切つてゐる。ぼうと霞んだ、靜かに湛ひた水に、
しだれた柳が落着いた柔かな味を添へてゐる。支那にも
こんなまとまつた景色があるのだと、物憂さとだるさとか
ら目覺めた私は、山を下りてから、城内をぶらつく足もとも
明るく力づいたものになつた。

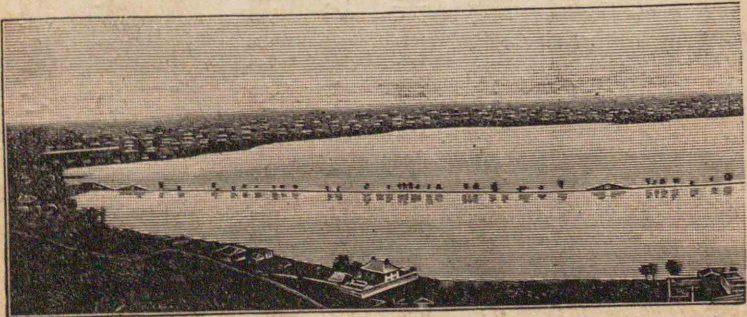
城内の西湖に瀕する處は、昔の城壁が取壞されて、外國人の

租借地を真似た四五十呎の押開いたバンドが、ずつと一直線に凡そ一哩の長さに出来てゐる。そこには三四階の支那宿が西洋式の窓を開いて軒を並べてゐる。旅人の宿泊心を唆る。まるで避暑地の海岸の氣分だ。廣東の城内から租借地の沙面に歸つたやうな沈痛な静かさでなく、落ちついた杭州城内から此の湖邊のバンドを行く心持には、華やかな静かさとは蟠りのない輕快さが漂つてゐた。



西

私たちはこのバンドを洋車で駈けぬけて、湖の北側に立つて居る新々旅館といふ支那旅館に入つた。支那旅館と言つても瀟洒な煉瓦造で、玄關をはひつた廣間に球臺のあるやうな行届いたホテルなのだ。私たちは其の湖に面する一室を占領して、ゐながら西湖の眺望を擅にする豫定であつたが、その豫定はまんまとはづれて、雞や豚を飼放しにしてある内庭に面する奥まつた二階の一室をあてがはれ、そこに行李をおろすべく



湖

餘儀なくされた。

兎も角も日のある中に出来るだけの遊覽をしようといふ

ので、旅館前からすぐ小舟をうかべさ

せて、林和靖の故跡の放鶴亭や、岳飛廟

を經めぐつた。舟はやつと四人まで

しか載せられないボートの舳艫の詰

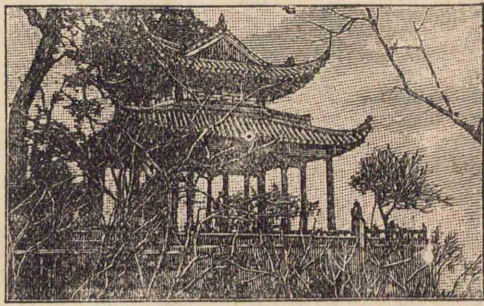
つたものだ。船夫は杓子の大きい櫂

を執つて船尾に腰掛けて操縦する。

日覆ひの白い布は船の長さだけ張つ

て、四人の座席は籐椅子で手輕に組立てゝある。青史を血

に染めた悲壯な事實も、高風の萬世に仰がれる隱逸の傳説



放鶴亭

林和靖

名ハ述

宋ノ高士

岳飛廟

宋ノ忠臣岳飛ヲ

祀ツタ廟舎

も、今の支那では遺憾ながら何の感興も惹かない、故跡の外

形は殘存してゐても、故跡の情味

は疾くに泥土に委してゐる。放

鶴亭、蘇小々の墓、岳飛廟、岳飛の墓、

それらの過去の史傳の傳へた強

烈な感興と、現在の故跡の示す落

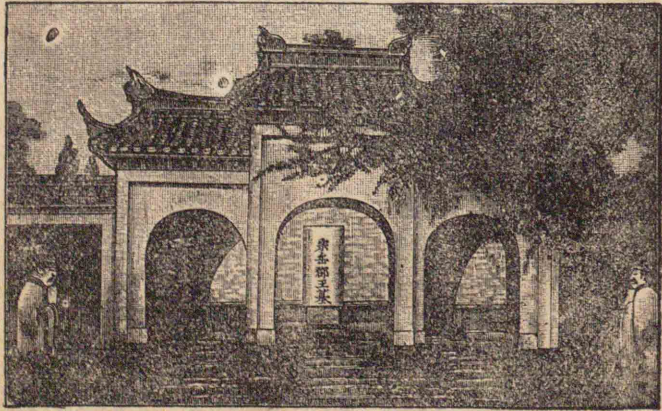
莫たる光景の餘りにかけ離れた

相違、それを仔細に觀てゐるには

堪へられなくなる。果ては今昔

の感とでもいふものか、うら悲し

く、涙ぐましくなる。それよりも此の一葉の舟を湖中に浮



岳飛の墓

蘇小々

一名ハ簡々

南北朝時代ノ女

詩人

べて滑かな水の上を何處を指すともなく漂つてゐる方が、
 せめてもの林和靖の高風を今に實現する詩的感興を喚ぶ
 のだ。實際湖中に漂つてゐると、氣は澄み胸は豁ける。支
 那漫遊の外客といふやうな氣分も、或はこの大陸の興亡の
 瀬戸際といふやうな心持も、總べて忘れられて、洗ひ落され
 て、たゞこの自然と我とが融會してしまふやうな氣がする。
 馬鹿にいゝ氣持になつて、日のくれぐれに宿に歸つて來た。
 龜の甲を仰向けにしたやうな支那風呂ではあつたが、湯を
 浴びることの出來たのも意外なことだつた。
 夜に入ると珍しくいゝ月だ。私たちは晝間の扁舟に坐し
 て東坡堤の水門を潜つてひろくとした湖面に出た。晝

清風徐來
 蘇東坡、前赤壁
 賦、句
 月明星稀
 魏、曹操、短歌
 行、月明星稀
 烏鵲南飛云々

間は彼方此方に白い日覆ひが、さも鷗でも浮んでゐるかの
 やうに往來してゐたが、今はどう見通しても舟らしい影は
 目に入らない。たゞ東岸のバンドに立ち並んだ旅宿の燈
 が漁人のそれのやうに水にきらついてゐるのみであつた。
 「清風徐來、水波不起」とか、「月明星稀」とかいふやうな文字は、た
 ださういふ文字として目に映ずるが、その文字の齎す詩人
 の胸裏には突入し得ない。それも今日の支那の國情では
 已むを得ない、自然であるかも知れないと、舟中の外客二人
 は妙に大人びた氣になつて、この清風明月を我が物顔に振
 舞つてゐた。

兎も角あのバンドに上つて更に一杯の酔を買ふのも一興

ではないかといふことになつて、船首をその方に向けた。
 烏鵲南に飛ぶと言つたやうな夜空がしいんとして飽くま
 で静かさを押しつけてゐる。くつきりした西の山なみは、
 晝間よりもずつとあとじさりしたものゝやうに、我等から
 かけ離れてしまつた。尊い淋しさが折ふしの漣に連れて、
 ひし〜と私たちの胸にしみ込むのであつた。

(支那に遊びて)

仁和寺

京都市ノ西北郊
御室ニアル眞言

宗ノ寺

兼好法師

俗名吉田兼好

鎌倉室町時代ノ

文學者

正平五年(1110)

寂

年六十九

石清水

男山八幡宮

七 仁和寺の法師

兼好法師

仁和寺にある法師、年よるまで石清水を拜まざりければ、心
 うく覺えて、ある時思ひ立ちて、たゞ一人かちより詣でけり。

極樂寺・高良
共ニ男山ノ麓ニ
アル社寺



(華國筆 蕙一田浮)

極樂寺高良などを拜みて、かば
 かりと心得て歸りにけり。さ
 て、かたへの人にあひて、年頃思
 ひつること果し侍りぬ。聞き
 しにも過ぎて尊くこそおはし
 けれ。そも参りたる人ごとに
 山へ登りしは何事かありけん、
 ゆかしかりしかど、神へ参るこ
 そ本意なれと思ひて山までは
 見ずとぞ言ひける。少しの事
 にも、先達はあらまほしきこと

なり。

これも仁和寺の法師、わらはの法師にならんとする名残とて、各遊ぶ事ありけるに、酔ひて興に入るあまり、傍なる足鼎を取りて頭にかづきたれば、つまるやうにするを、鼻をおしひらめて、顔を入れて舞ひ出でたるに、満座興に入ること限なし。

しばし奏でて後、抜かんとするに大かた抜かれず。酒宴ことさめて、いかゞはせんと惑ひけり。とかくすれば、首のまはりかけて、血垂り、たゞはれにはれみちて、息もつまりければ、打割らんとすれど、たやすく割れず、ひゞきて堪へ難かりければ、叶はで、すべきやうなくて、三足なる角の上に帷子を

うちかけて、手を引き、杖をつかせて、京なるくすしがりゐて行きけり。道すがら人の怪しみ見ること限なし。醫師のもとにさし入りて向ひ居たりけん有様、さこそはことやうなりけめ。物を言ふも、くゞもり聲に響きて聞えず。「かゝることは書にも見えず、傳へたる教もなし」と言へば、又仁和寺に歸りて、親しきもの、老いたる母など枕がみに寄りゐて泣き悲しめども、聞くらんとも覺えず。

かゝる程に或者のいふやう、たとひ耳鼻こそきれうすとも、命ばかりはなどか生きざらん。たゞ力を立て、引きたまへ。とて、藁のしべをまはりにさし入れて、かねを隔て、首もちぎるばかり引きたるに、耳鼻缺けうげながら抜けにけり。

辛き命まうけて、久しくやみ居たりけり。(徒然草)

八 佐那田餘一 その一

兵衛佐
右兵衛權佐源頼朝
大庭三郎景親
大庭
俣野
俣野五郎景久
岡崎四郎
三浦介義明ノ弟
義忠
佐那田餘一義忠
岡崎四郎義實ノ子

兵衛佐殿仰に、武藏相模に聞ゆる者どもは皆ありと覺ゆ。中にも大庭俣野兄弟先陣と見えたり。此等に誰をか組ますべきと宣へば、岡崎四郎義實申しけるは、「弓矢を取つて戦場に出づる程の者、敵一人に組まぬ者やは侍るべき。親の身にて申す事、人の嘲を顧みざるに似たれども、存ずる所を申さゞらんも却て又私あるに似たるべし。義忠は此の間大事の所勞仕つて未だ力つかずや侍らめども、心しぶとき奴にて、弓矢取つては等倫に劣るべからず。其の器にはべ

り。仰せ含めらるべきかと申しければ、やがて義忠を召してけり。

餘一其の日の装束には、青地の錦の直垂に、赤緘の肩白の鎧の裾金物打つたるを着て、つま黒の箭負ひ、長覆輪の太刀を佩きけり。折烏帽子を引立て、弓を平め、跪きて將軍に平伏せり。白葦毛なる馬をぞ引かせたる。其の體、あたりを拂つてぞ見えし。兵衛佐、佐那田に宣ひけるは、「大庭俣野は名ある奴原なり。今日の軍の先陣仕つて、彼等二人が間に組め。源氏の軍の手合なり、高名せよ」とぞ宣ひける。餘一仰を蒙り、畏つて御前を立ち、郎等に文三家安と云ふ者を招き寄せて、「義忠が母又子どもが母にも語るべし」とて云

ひけるは、「昨日打出てしを最後と思ひ給ふべし。兵衛佐殿、今度の軍の先陣勤めよと直に仰せたびたれば、多くの人中に擇ばれたる事、弓矢取る身の面目なり。されば命を限に戦はんずれば、生きて再び歸る事よもあらじ。豫て斯くと知り侍らば、何事も申置くべかりけり。其の事今は力無し。我討たれぬと聞き給ひなば、母御前の御歎こそ思ひ残し奉れ。縦ひ我死したりとも、世の靜まらん程は、二人の稚き者をば如何ならん野の末、山の奥にも隠し置きて、佐殿の世に立ち給うたらん時、先祖なれば岡崎と佐那田とをば申し賜はりて、兄弟に知らせてたび候へ。さては女房も子供が後見しておはしませ。佛に花香進らせて後の世弔ひ

岡崎と佐那田
共ニ神奈川縣中
郡ニアル

給へ。父岡崎殿も佐殿の御供なれば、軍の習生死を知らず、女性は何事か有るべきなれば、斯く申置くなり」と慥に云ひ傳ふべし。又汝も稚き者ども不便に育て、世にあらば憑め世になくば憫みて義忠が形見とも思へ。など云ひければ、文三申しけるは、「殿の二歳の時より、家安親代と成つて、夜は胸にかゝへ奉つて夜もすがら勞り、晝は肩にのせ日ねもすに育み奉る。早く成人し給うて、人に勝れ給はん事を願ひき。五六歳になり給ひしかば、竹の小弓に小竹矧の矢、的草鹿とこそ射れ、かくこそ射れ、馬に乗つてはとこそ馳すれ、かくこそ馳すれと教へ育て奉りぬ。殿は今年二十五、家安五十七に罷成る。若き人だに主命とて先陣を蒐けて死なんと宣

ふ。殿を見捨て、家安が生きのこりては何かせん。又人の言はん事こそはづかしけれ。佐那田餘一の最期には恥ある郎等身に副はず。文三家安が如何程命を生きんとてか最期の軍に主を捨て、逃げたりけん。と申さんことも口惜し。死なば一所の討死なり、左様の事をば誰にも仰せられよかし。とて、三郎丸といふ童を招き寄せ、申し含めて遣はしけり。

餘一既に打出でければ、佐殿は義忠が装束毛早に見ゆ、着替へよかし。と宣へば、餘一は弓矢取る身の晴振舞、軍場に過ぎたること候まじ、尤も願ふ所に侍り。とて、十五騎の勢を相具して進み出でて申しけるは、源氏世を取り給ふべき軍の先

陣承つて、蒐出でたるを誰とか思ふ。音にも聞くらん、目にも見よ、三浦介義明の弟に本は三浦悪四郎、今は岡崎四郎義實、その嫡子に佐那田餘一義忠、生年二十五。我と思はん人は組めや。とて叫んで蒐く。弓手は海、馬手は山、闇さは闇し、雨は射に射て降る、道は狭し、馬にまかせてぞかけ行きける。

平家方より、餘一は善き敵ぞ、餘すな。とて進む者共には、大庭三郎景親、俣野五郎景久、長尾新五、新六、八木下五郎漢楊五郎、荻野五郎會我太郎、原宗四郎、澁谷莊司、瀧口三郎、稻毛三郎、久下權頭、淺間三郎、廣瀬太郎、岡部六彌太、同彌次郎、熊谷次郎等を先として、究竟の兵七十三騎、佐那田一人に組まんとて我

先に我先にと逸れども、闇さは闇し、道は狭し、馬次第にぞ打つたりける。

九 佐那田餘一 その二

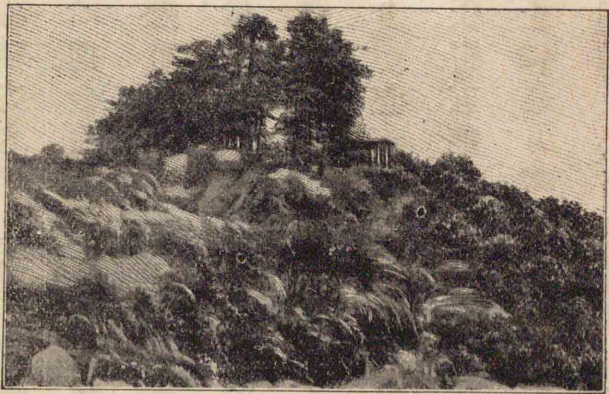
二十三日の黄昏時の事なれば、敵も味方も見え分かず。餘一は文三を呼んで、家安慥に聞け、我は相構へて大庭、俣野が間に組まんと思ふなり。組む程ならば急ぎ落合ひて敵の首を取れ。此の間の勞りに力無く覺ゆれば、像て云ふぞと云ふ。文三、誰もさこそ存じ候へ。殿の大庭に組み給は、家安は俣野、我大庭に組み候は、殿は俣野に組み給へ。とて進む處に、岡部彌次郎、餘一組まんと志して、鹿毛なる馬に乗

二十三日
治承四年(八七三)
八月二十三日

つて馳來る。餘一は岡部とは思ひ寄らず、大庭か俣野かと思ひ、馳寄りて兜の天邊に手を打入れて鞍の前輪に引付けて頸を搔き、取上げて雲透きに見れば、思ふ敵にはあらずして岡部彌次郎なり。「あな無慥や、鹿待つ處の狸とは此の事にや。何しに來つて義忠に打たるらん」とて首をば谷へぞ投げ入れける。餘一が乗つたる馬は、白葦毛太く逞しきが七寸に餘りて、鼻の先、瓠の花の如く白かりければ、名をば夕顔と云ふ。東國一の強馬なり。もと三浦介が許にありけるが、餘りに強くてたやすく乗る者無かりけるを、岡崎所望して乗りけるが、それも進退し煩ひたりけるに、餘一ばかりぞ乗從へたりけ

る。されども岡崎持和げて三浦へ返したれば、本の栖處へ歸つたりとて都返りと名づけたり。佐那田折節馬無くて又乞返したれば、古巢へ歸つたりとて鶯とも呼びけり。元來強き馬なりけれども、己が力を憑みつゝ、出雲轡の大きなるに手綱二筋差合せてぞ乗つたりける。岡部彌次郎が首切りける時、鎧武者の身の落つるに驚きて、つと出でて走り行く。さる者ぞと心得て、引留めんくとしけれども、此の馬の癖として、口をば主に打ちくれて胸にて走る馬なりけり。猶留めんと引く程に手綱三つに切れければ、左右の水付執へたり。左右の水付引きもぎて、心の儘に引きて行く。大庭三郎は弟の俣野五郎に、構へて餘一に組み給へ、景親も

目に懸らば組まんずるぞ」と云ふ。俣野は、餘りに闇くて敵も味方も見えわかず、餘一も何處やらんと云へば、餘一が鎧は裾金物の殊にきらめきて、馬の毛も白かりき。白き幌を懸けたりつれば、著しかりつるなり」と教ふ。俣野馳出でぬ。餘一馬に引かれて近づきたり。俣野敵の寄すると思ひければ、佐那田餘一義忠と名乗りつるは落ちぬるかと呼びけり。無下に近かりければ、義忠此處にあり。問ふは誰ぞ。「俣野五郎景久」と名乗るや、遅き押並べて馬の間へ落重なる上になり下になり、驛返し持返し、山の岨を下りに大道まで四段ばかりぞ轉びたる。今一返しも轉びなば、互に海へは入りなまし。



佐那田餘一侯野五郎組の遺蹟

侯野は大力と聞くに、如何したりけん下に推附けられてう
つぶしに臥し、頭は下に、足は上に、
起きんくとしけれども力無か
りける。餘一は上にひたと乗り
得て、義忠敵に組みたり、落重なれ、
落重なれ」と呼びけれども、家安を
始めとして郎等ども押隔てられ
て續く者なし。侯野今は叶はじ
と思ひて、景久、佐那田に組みたり。
續けやく」と呼びけるに、長尾新
五聲につきて落ちあひて、「上や敵、下や敵」と問ふ。餘一は上

に乗りながら、「斯く宣ふは長尾殿か。上ぞ景久、下ぞ餘一、過
ちし給ふな」と云ふ。侯野下にて、「上ぞ餘一、下ぞ景久、過ちす
な」と云ふ。頭は一所にあり、闇さは闇し、聲は息突きて分明
に聞分かず。上よ下よと論じければ、思ひわびてぞ立つた
りける。

侯野「あな不覺の殿や、聲にても聞き知りなん。鎧の毛をも
探り給へかし」と云ふ。長尾誠にと思ひて鎧の毛をぞ探り
ける。餘一「顯れぬと思ひて、右の足を揚げて長尾をむづと
踏む。踏まれて下りに弓長三杖ばかりとゞ走りて倒れに
けり。その間に餘一刀を抜いて侯野が首を搔く。搔けど
も搔けども切れず、刺せども通らず。餘一刀を持揚げて雲

透きに見れば、鞆卷の栗形缺けて、鞆ながら抜けたりけり。鞆尻くはへて、抜かんくとしけれども、運の極みの悲しさは、岡部彌次郎が首切つたりける刀を拭はず、鞆に差したれば、血詰りして、抜けざりけり。長尾新五が弟に新六落合ひて、餘一が胡籙の間にひたと乗得て、兜の天邊を引仰けて頭を搔く、無慙といふもおろかなり。侯野を引起して、いかに手や負ひたる。と問へば、首こそ重く覺ゆれ。と云ふ。頸を探ればぬれくとあり。手負うたるにこそとて、餘一が刀を見れば、鞆尻一寸ばかり碎けたり。強く刺したりと覺えたり。その後侯野は軍はせず、佐那田餘一は侯野五郎止めたり。と叫びければ、源氏方には惜みけ

り、平家方にはこれを悦びけり。〔源平盛衰記〕

一〇 膽 力

嘉納治五郎

嘉納治五郎
教育家
前東京高等師範
學校長
講道館師範
貴族院議員
萬延元年(一五〇)
生

大丈夫と生れたからには、死生の境に出入して従容自若として事に當り、天下の大事を談笑の間に決するだけの膽力を有したいものである。膽力のあるものは、白刃眼前に閃き來り、危岩頭上に崩れかゝるとも、悠然として身を持することが出来る。膽力のないものは、天井から鼠の糞が一つ落ちて來ても、膽を冷し色を失ふやうなことになるものである。

膽力は天稟に之を有して居るものも少からぬことである

ネルソン
英國ノ海軍提督
(1758-1805)

が、又決して修養し得られぬものではない。上杉謙信が四五歳の時、大敵に追はれて門番所の板敷の下に潜伏しながら安眠して居つたことや、徳川光圀が六歳の時、暗夜に刑場に行つて死人の首を持歸つたことや、ネルソンが幼時から恐怖の何ものたるを知らなかつたことなどは、皆天稟と見るべきものであるが、修養によつて剛膽の人となつた例も亦決して稀でない。

昔武田信玄の部下に岩間大藏左衛門といふ武士があつた。その容貌は魁偉で、一見したところ儼然たる大丈夫であつたが、その性質は至つて卑怯であつた。信玄が之を實戦にためしてみたのに、七たび進んで七たび退いた。信玄はこ

れではとても普通の方法で教誨激勵することは出来ない。と思つて、或日又戦争の始つた時、大藏左衛門を掩護物のない處に縛りつけ、敵に向つて坐らせて、一步も身動きの出来ないやうにした。矢丸は雨のやうに飛んで来る。銃聲は雷の如くに轟く。大藏左衛門は恐怖して殆ど死人のやうになつてしまつた。併しその戦争のしまひまで、幸に矢丸に中らなかつた。そこで大藏左衛門は醜然として悟る所あり、壽命さへあれば、雨のやうに下る矢丸でも中らない、死は決して畏るべきものでないと知り、その後は戦争毎に勇を奮つて前進し、遂に武名を揚げたといふことである。之を見ても、諦めるといふ心の持方の膽力養成に必要であ

る事がわかる。危険災害等の場合に於て、成るべく安全に之を避けようとするのは自然の人情に相違ないが、しかし、さういふ心の爲に却て怯懦に陥る事があるのである。その最も悪い結果を身に引受けても是非に及ばぬといふ覺悟を極めれば、膽は自然にすわるのである。例へば眞劍勝負をするといふ場合に、敵刃を逃れようと命を惜んではならない。まづ身を捨てる覺悟をきはめ、吾が骨を切らせて敵の命を奪へといふやうに死に身になつて、その上に吾が手段と伎倆とを盡す方が、命を惜むよりは自由がきくから自然と數倍の働をする事が出来る。強ひて危害を避けようとする、煩悶し、疑惧し、狼狽して、自械自縛するので、十分

の伎倆も六七分にしか働かず、却て不結果に陥るのである。諦めるといふ心の持方の練習のある者は、危害が身に迫つたときにも、此の際に狼狽したところで仕方が無い、只今執るべき方法は唯一つのみと諦め、その方法に全力を盡して、さて敗れたならばそれまでの事と覺悟を極めてかゝるか、別に惶惑するやうなことはない。

落膽喪神は、或場合にはその危険の結果を豫想した後ではなくして、衝動的に直接の瞬間に起つて來ることがある。これは動物の本能の一つで、殆ど制止し難き勢を以て發動するものであるが、かゝる場合に何か良い工夫はないであらうか。

雲居和尚といふのは、伊達政宗に招かれて松島の瑞巖寺に住んで居つた名僧であるが、毎夜雄島の石窟に住つて坐禪するのを常として居つた。或時一少年がその悟道の程をためさうと思つて、路傍の松の上に隠れ、雲居が下に來た所を、手を延して頭をぐつと攫んだ。雲居は立止つたまゝで動かなかつたので、少年は手を放した。數日の後、その少年は雲居に向ひ、近ごろ淋しい處で怪物に出會つたことはいふなかつたか。と問うたら、雲居は之に答へて、いや別に何も見たことはない。五六日前、闇の中で自分の頭を攫んだものがあつたが、その手に暖みがあつたから、子供らの惡戯だと思つた。といつたといふことである。その雲居の沈勇は如何

にして養はれたものであるか、定めて心膽を練つた結果であらう。

しかし、かゝる場合に處すべき簡單なる一法として、此に少年者に告ぐべき事がある。それは他でもない、下腹に力を入れることである。これは氣を落ちつける一法として古來經驗の上から有効と認められて居るものである。世に、理窟の上からは妖怪のないことを信じてゐながら、暗夜墓地を通過して石塔の陰から突然犬の飛出すのに、思はず膽を冷すやうなものがある。かういふ時に下腹に力を入れると、今飛出したのは犬であるか、猫であるか、或は他の者であるか、判断が付き易くなるのである。衝動的に起る恐怖

心を去るのも、畢竟鍛錬の功に待つ外はないのであるが、吾人は年少の人に、まづその手始の一法として、此の事を勧めるのである。さうして終には種々の工夫を凝して、天地の顛倒するやうな大變にも、泰然自若として我を失はない様な剛膽な人とならんことを望むのである。(青年修養訓)

一一 血 氣

吉田 松 陰

平時喋々臨事必啞
平時笑々臨事必滅
孟子助長の害を論をほを見つべし
八十送行の時諸友拔劍の事あり此の頃

吉田松陰
名ハ矩方
長州藩ノ志士
安政六年(五九)
歿
年三十

八十
佐世八十郎
前原一誠ノ前名

暢夫
高杉晋作
字ハ暢夫

また暢夫が江戸に在つて斬刃此事あはれを聞くと是等の事より諸友氣魄衰萎の程を知りて僕今死生全く念頭に絶えぬ自ら信を斷頭場に登り候はば血色散て諸氏の下にあらずと然れども平時は大抵用事此外一言せむ一言すは時を必を温然たる和氣婦人少女の如し是柔魄の源なり慎言謹行なればは大氣魄は出づるものにあらず張良鐵椎

張良
漢ノ高祖ノ謀臣
博浪沙中テ秦ノ
始皇ニ鐵椎ヲ擲
ツタ

當時の面目を想ひ見はづし僕去月二十
 十日より一齋の肉一滴の酒をたぐは
 ばよ氣魄を増ふこと大なり僕己に諸友
 に絶つ諸友亦僕に絶つ然れども平生
 の友誼のため區々一言を發も是僕が金
 空の語にあらずを聖賢傳心の教なれば
 輕視まほふことなけれ
 血氣尤も是事を害ま暴怒亦是事を害す
 血氣暴怒を粉飾まほふその害更に甚だし

中谷

不明

久坂

久坂義助

名ハ通武

松陰ノ妹婿

元治元年(三五四)

歿

年二十六

德富健次郎

號ハ蘆花

文學者

明治元年生

逗子

相模國三浦郡逗子町

中谷久坂為杉等に傳へる一帖の候

(吉田松陰傳)

一二 相模灘の落日

德富健次郎

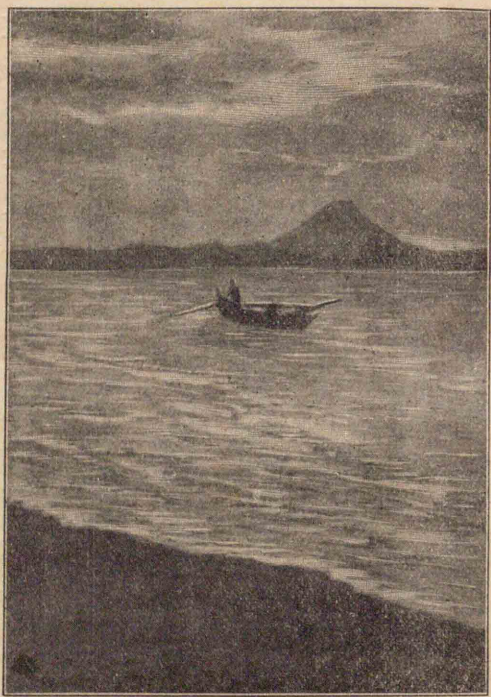
秋冬、風全く風ぎ、天に一片の雲なき夕、逗子の海濱に立つて
 伊豆の山に落つる日を望むに、世にかゝる平和のまた多か
 るべしとは思はれず。

日の山に落ちかゝりてより、その全く沈み終るまで、三分時
 を要す。日の西に傾くや、富士を始め相豆の連山、煙の如く
 淡し。日更に傾くや、富士を始め相豆の連山、次第に紫とな
 る。日更に傾くや、富士を始め相豆の連山、紫の肌に金煙を

帶ぶ。此の時濱に立つて望めば、落日海に流れて吾が足下に到り、海上の舟は皆金光を放ち、逗子の濱一帯、山といはず、砂といはず、家といはず、松といはず、人といはず、轉がりたる生簀の籠も、落ち散りたる藁屑も、赫焉として燃えざるはなし。かゝる風、夕に落日を見る身は、恰も大聖の臨終に侍する感あり。莊嚴の極、平和の至。物あり、融然として心に浸む。喜といはんは過ぎ、哀みといはんは未だ及ばず。已にして日愈、落ちて伊豆の山にかゝるや、相豆の山忽ちに藍色に變ず。唯富士の巔、舊に仍つて紫の上に更に金光を帯ぶるのみ。

伊豆の山已に落日を銜み初めぬ。日一分を落つれば海に

浮べる落日の影一里を退く。日は迫らず、寸又寸、分又分、別れ行く世をば顧みがちに、悠々として落ちゆく。



夕の岸海子逗

已にして残り一分となるや、急に落ちて眉となり、眉切れて線となり、線瘖せて點となり、忽ちにして無し。眼を上ぐ

れば世界に日なし。光消えて、海も山も蒼然として憂ふ。日は入りぬ。しかも餘光の忽ち箭の如く上射し、西空の金

よりも黄なるを見ずや。偉人の歿せる後、實に斯の如し。日の落ちたる後は富士もほどなく蒼ざめ、やがて西空の金は朱となり、燻りたる樺となり、上りては濃き藍色となり、日の遺孽とも思はる、明星の次第に暮れゆく相模灘の上に眼を開きて、明日の出日を約するが如きを見るなり。

(自然と人生)

北畠親房
吉野朝廷ノ忠臣
從一位准三后
正平九年(1015)
薨
年六十三
又の年
延元三年(九九)
顯家卿
親房ノ長子
延元三年(九九)
戰歿
年二十一
親王
義良親王
後御即位アツテ
後村上天皇ト申
ス

一三 吉野の宮

北畠親房

又の年戊寅の春二月、鎮守府大將軍顯家卿、また親王を先だて申し、かさねて打上る。海道の國々悉く平ぎぬ。伊勢伊賀を経て大和に入り、奈良の京になん着きにける。それよ

り處々の合戦、あまたたび互に勝負ありしに、同じき五月、和泉の國にての戦に、時や至らざりけん、忠孝の道こゝにて極りにき。苔の下にも埋れぬものとは、たゞ徒に名をのみぞ留めてし。心憂き世にもあるかな。官軍なほ心を勵まして、男山に陣を取りて暫く合戦ありしかど、朝敵忍びて社壇を焼拂ひしより、事成らずして引退く。北國に在りし義貞も度々召されしかど、上りあへず、させる事なくて空しくさへなりぬと聞えしかば、いふばかりなし。さてしも止むべきならずとて、陸奥の皇子又東へ向はしめたまふべき定めあり。左少將顯信朝臣中將に轉じ、從三位に敘せられ、陸奥介鎮守府將軍を兼ねて遣はさる。東國の

陸奥ノ皇子
義良親王
顯信
顯家ノ弟

官軍悉く彼の節度に従ふべき由を仰せらる。親王は儲の君に立たせたまふべき旨申し聞かせたまふ。七月の末つ方伊勢に越えさせ給ひて、神宮に事の由を啓して御船の艤ひし、九月の初、纜を解かれしに、十日あまりの事にや、上總の地近くより、空の氣色おどろしく、海上荒くなりしかば、又伊豆の崎といふ方に漂はれしに、いと波風夥しくなりて、數多の船行方知らずなりけるに、皇子の御船は障りなく伊勢の海に着かせ給ふ。顯信朝臣は元より御船に候ひけり。同じ風のまぎれに、東を指して、常陸の國なる内の海に着きたる船ありき。方々に漂ひし中に、この二つの船、同じ風にて東西に吹分けらる。末の世には珍らか

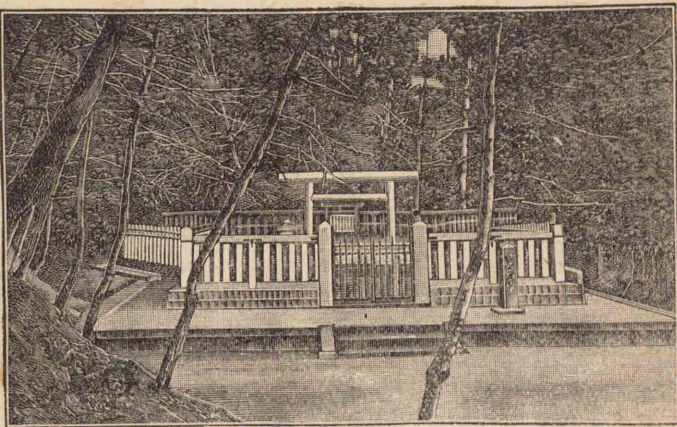
なる例にぞあるべき。儲の君に定まらせ給ひて、例なき鄙の御住居も如何と覺えしに、皇太神のとゞめ申さしめ給ひけるなるべし。後に吉野に入らせましく、て御目の前にて天位を嗣がせ給ひしかば、いとゞ思ひ合せられて尊くもあるかな。又常陸はもとより志す方なれば、御志ある輩相計らひて、義兵こはくなりぬ。

さても舊都には、戊寅の年の冬改元して曆應とぞいひける。吉野の宮にはもとの延元の號なれば、國々も思ひくゝの年號なり。唐土にはかゝる例多かれど、此の國には例なし、されど四年にもなりぬるにや。大日本島根は固より皇都なり、内侍所神璽も吉野におはしませば、いづくか都にあらざ

舊都
京都
光明院オハス

るべき。

仲尼
孔子ハ春秋ヲ筆
削シテ筆ヲ獲麟
ニ絶ツタ



後醍醐天皇御陵

さて八月の十日餘り六日にや、秋霧に冒されさせ給ひて、かくれまし〜ぬとぞ聞えし。ぬるが中なる夢の世、今に始めぬ習とは知りながら、かず〜目の前なる心地して、老の涙もかきあへねば、筆の跡さへ滞りぬ。むかし仲尼は獲麟に筆を絶つとあれば、こゝにて止りたけれど、神皇正統の邪なるまじきことわりを申し述べて、素

左大臣
關白左大臣藤原
經忠

胎中天皇
應神天皇

意の末をもあらはさまほしくて、強ひて記しつくるなり。かねて時をも悟らしめたまひけるにや、前の夜より親王をば左大臣の第に移し奉られて、三種の神器を傳へ申さる。後の號をば仰のまゝにて後醍醐天皇と申す。天下を治めたまふこと二十一年、五十二歳おまし〜き。昔、仲哀天皇熊襲を攻めさせたまひし時、行宮にて神ざりましましき。されど神功皇后程なく三韓を平げ、諸皇子の亂を鎮められて、胎中天皇の御代に定まりき。この君聖運ましまし〜かば、百七十餘年中絶えにし一統の天下を知らせ給ひて、御目の前にて日嗣を定めさせ給ひぬ。功もなく徳もなき盗人世に起りて、四年あまりが程宸襟を惱まし、御世

今ノ帝
後村上天皇

を過ぎたまひぬれば、御怨念の末空しくありなんや。今の帝亦天照大神よりこの方の正統を受けましくぬれば、この御光に争ひ奉る者やはあるべき。なか／＼かくて鎮まるべき時の運とぞ覺ゆる。(神皇正統記)

霜月

正平二年(1097)
十一月

一四 如意輪堂

阿部野の合戦は霜月二十六日の事なれば、渡邊の橋よりせき落されて流るゝ兵五百餘人、かひなき命を楠木に助けられて、河より引上げられたれども、秋の霜肉を破り、曉の氷、膚に結びて、生くべしとも見えざりけるを、楠木情ある者なりければ、小袖を脱ぎかへさせて身を温め、藥を與へて創を療

兩度の合戦

河内國譽田林ノ
戦ト攝津國阿部

野ノ戦

將軍
足利尊氏

左兵衛督
足利直義

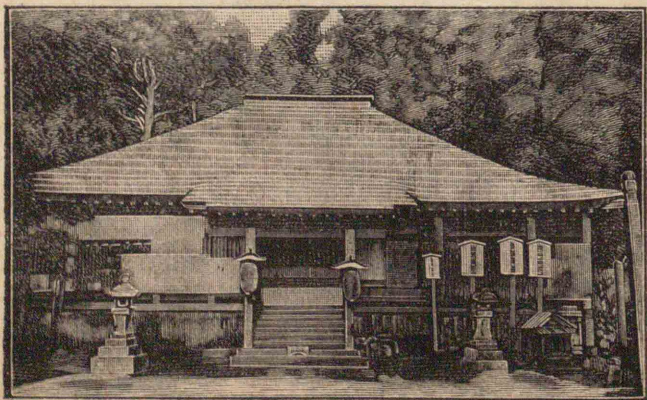
せしむ。かくの如く四五日皆勞りて、馬に乗る者には馬を引き、物具失へる人には物具を着せて、色代してぞ送りける。されば敵ながらその情を感じる人は、今日より後、心を通ぜんことを思ひ、その情を報ぜんとする人は、聽て彼の手に屬して、四條繩手の合戦に討死をぞしける。

さて今年兩度の合戦に、京勢無下に打負けて、畿内多く敵の爲に侵し奪はる。遠國亦蜂起しぬと告げければ、將軍左兵衛督の周章、只熱湯にて手を洗ふが如し。今は末々の源氏、國々の催し勢などを向けては叶ふべしとも覺えずとて、執事高武藏守師直、越後守師泰兄弟を兩大將にて、四國中、國・東山・東海二十餘箇國の勢をぞ向けられける。

京勢雲霞の如く淀八幡に着きぬと聞えしかば、楠木帶刀正行、舍弟正時、一族打連れて、十二月二十七日吉野の皇居に參じ、四條中納言隆資を以て申しけるは、父正成、庭弱の身を以て大敵の威を碎き、先朝の宸襟を休めまゐらせ候ひし後、天下程なく亂れて、逆臣西國より攻上り候ひし間、危きを見て命を致す所、豫て思ひ定め候ひけるかに依つて、遂に攝州湊川にして討死仕り候ひ了んぬ。その時、正行十一歳に罷成り候ひしを、合戦の場へは伴なはで河内へ歸し、死に残り候はんずる一族を扶持し、朝敵を亡し、君を御代に即け參らせよ。と申し置きて死にて候。然るに正行、正時已に壯年に及び候ひぬ。この度我と手を碎き合戦を仕り候はずば、且は

討死
延元元年五月十七日

亡父の申し、遺言に違ひ、且は武略の言甲斐なき謗に落つべく覺え候。有待の身思ふに任せぬ習にて、病に犯されて早世仕る事候ひなば、只君の御爲には不忠の身となり、父の爲には不孝の子となるべきにて候間、今度師直・師泰にかけ合ひ、身命を盡し合戦仕つて、彼等が頭を正行が手にかけて取り候か、正行、正時が首を彼等に取りられ候か、その二つの中に戦の雌雄を決すべきにて候へば、今生



如意輪堂

にて今一度君の龍顔を拜し奉らん爲に、參内仕つて候と申しもあへず、涙を鎧の袖に懸けて、義心その氣色に顯れければ、傳奏未だ奏せざる先に、まづ直衣の袖をぞ濡されける。主上乃ち南殿の御簾を高く捲かせて、玉顔殊に麗しく、諸卒を照臨あつて、正行を近く召して、以前兩度の戦に勝つことを得て、敵軍の氣を屈せしむ。叡慮まづ憤を慰する條、累代の武功返すも神妙なり。大敵今勢を盡して向ふなれば、今度の合戦天下の安否たるべし。進退度に當り、變化機に應ずる事は、勇士の心とする所なれば、今度の合戦命を下すべきにあらずといへども、進むべきを知つて進むは、時を失はざらんが爲なり、退くべきを見て退くは、後を全うせん

筆蹟
鎮守社壇回祿事
殊以驚歎入候但
神體不燒失火中
御坐之條未代之
奇瑞言語道斷候
歎念可經奏聞候
恐々謹言
五月廿六日
正行花押
觀心寺々僧御中

が爲なり。朕汝を以て股肱とす慎んで命を全うすべし。と仰せ出されければ、正行頭を地に付け、とかくの勅答に及ばず、只之を最後の參内なりと思ひ定めて退出す。正行・正時・和田新

鎮守社壇回祿事仕心
殊以驚歎入候但
神體不燒失火中
御坐之條未代之
奇瑞言語道斷候
歎念可經奏聞候
恐々謹言
五月廿六日
正行花押
觀心寺々僧御中

(寶墨徵史) 蹟筆行正楠

發意、舍弟新兵衛以下、今度の軍に一足も引かず一處にて討死せんと約束したりける兵百四十三人、先皇の御廟に参りて、今度の軍難儀ならば討死仕るべき暇を申して、如意輪堂の壁板に、各名字を過去帳に書きつらねて、その奥に、

あへらじとかねて思へば、梓弓

ふき數にゐる名をぞせむる。

と、一首の歌を書留め、逆修の爲と覺し、各鬢の髪を切りて佛殿に投入れ、その日吉野を打出でて敵陣へとぞ向ひける。(太平記)

有島武郎

文學者
明治十一年生

一五 空中戦その一

菊池 寛

到頭春になつた。佛蘭西風の古城の庭園には薔薇の花が咲いて、鶯が鳴き出した。森からは啄木鳥の聲が聞え出した。野には一面に罌粟が眞赤な花を着けた。それが塹壕のつい近くまで咲續いてゐる。麥の背が緑にぐんぐんと伸びて行つた。

陰惨な冬の塹壕生活の痛苦をしみとと嘗めながら春の來るのを待ち侘びてゐた兵士達は、一旦春が來たとすると、どんなに塹壕の中から廣濶な地面に出たがつた事だらう。縦令塹壕を一步踏出すと、其處には彈丸の流れが必然の死を意味してゐたにしろ、彼等は兎も角塹壕を出て、思ふさま新鮮な空氣を吸ひたかつた。冬の間無味な、じめじめとした

生活から虐げられ腐らされてゐた彼等の生命は、跳躍と自由とを望んで、むづ／＼してゐた。塹壕を離れる事が許されるなら鐵火の中へでも突進しようといふのは、將校といはず兵卒といはず一同に共通した希望であつた。かうした將卒の心持は攻撃を敢行するには絶好な機會であつた。英軍の總司令部では靜かに總攻撃の策をめぐらしてゐた。孰れの場合にも戰機は先づ飛行機の活躍から始つた。薄緑に晴れた大空の遙か彼方に、瑞西境の高山の彫琢されたやうな鮮かな山影が見え出した頃から、彼我の飛行機の活躍は日毎に烈しくなつた。

が、英軍の飛行機は、ともすれば獨のフォツカーに惱まされた。フォツカーは或和蘭人に發明された新しい型の飛行機である。フォツカーが獨軍の飛行機としてその無氣味な姿を戦線に現したのは今年の初めからであつた。彼は常に八千呎以上の高空を遊弋してゐた。そして鷺鳥が地上の獲物を狙ふやうに、遙かの低空を飛行する英機の姿を物色した。敵の姿が目に入ると、彼は一搖り揺つて機首を逆様にするや否や、敵機を目がけて眞一文字に落下するのであつた。彼の機體は急速の落下に適當するやうに作られてゐた。しかも急下しながら拳下りに切つて放す機關銃の亂射の正確さは、英佛軍の飛行機に取つて大なる脅威

ソム
佛國ノ東北部ニ
アル河ノ名

であつた。殊に彼を操縦してソムの空中を縦横に活躍する獨のインメルマン大尉の驍名は英軍飛行家をして殆ど顔色なからしめた。

獨逸の公報は續けざまに「インメルマン大尉はその幾番目の敵機を打落せり」と報告した。そしてその幾番目といふ數が日毎に増していつた。

「インメルマンを斃す」といふ言葉はもう三月の初めから英軍飛行隊の宿題であつた。それが五月の初めが來ても解けずに残つてゐた。インメルマンが高空からの逆落しの急襲を避けかねて射落された英機の數は無慮五十を越えるやうになつた。戦線の後方二哩にある英軍の第二格納

庫に屬する飛行將校達は、インメルマンの名を幾度腹立たしげに發音したか分らなかつた。

「今日はインメルマンの死骸に花輪を投げてやらう」と云ひながら、罌粟の花を摘んで、小さい花輪を用意して出發した英軍の飛行家は、幾人となくあつたが、しかし一人として歸つて來るものはなかつた。

インメルマンは敵機の墜落を見ますと、大きな波形を描いて地面近くの低空を飛んで、敵手の死を弔つた。そしてきまつて喪章の附いた小さい花輪を投ずるのであつた。

「インメルマンの死骸に花輪を投げる。それは英軍の飛行家に取つて、どれほど晴れがましいことであるか、わからな

つた。(心の王國)

二六 空中戦 その二

菊池 寛

第二根據地所屬のマツカビン少尉はつい今年の二月に佛のヴォザン飛行學校を卒業したばかりの青年將校であつた。普通のときならばまだ戦線に送られないほどの熟練さであつたのだが、飛行家の頻々たる戦死は此の未熟な青年將校を戰場へ送ることにならしめたのであつた。彼は戦闘飛行に就いてはまだ何等の自信をも持つてゐなかつた。併し沈着でそして果敢な彼の天性は彼の未熟の幾何かを補つてゐたのであつた。

六月一日にソム河一帶に於ける英軍の大攻撃が始つた。それと同時に、飛行隊の活躍も一段の目覺しさを加へた。八日の朝、マツカビン少尉は攻撃的遊弋に参加することを命ぜられた。敵陣地の上空を飛翔しながら爆弾を投下すると同時に、出會する敵機と渡り合ふことがその任務であつた。

未明から續いてゐた敵味方の砲彈が暫くとだえた。サウエジ中尉の機を先頭に味方の四機は相次いで上昇した。マツカビン少尉は殿であつた。まだ二分間も飛翔せぬ内に、彼等は左の上空はるかに十隻をくだらぬ敵機の二隊を見た。敵味方の隻數には大なる

相違があつた。が、サヴェジ中尉をはじめ四人の飛行家は、手痛き一撃を敵に試むべき好機の到来したのを喜んだ。彼等は何等の打合せもせず、しかも一齊に敵機の集團へと突入した。

敵はローランド型と、フォックカー型と今一つの型との混成隊であつた。

先頭に立つたサヴェジ中尉は見る間に真先の飛行機に突撃した。その機は倉皇として機首を廻らし、一目散に遁げてしまつた。巧に敵にかはされた中尉は直ちに一隻のフォックカーを目指して翔け下つた。烈しい射撃は交換された。敵味方の兩機は各、上空へ出ようとして烈しい操縦戦

を試みた。フォックカーはくるりと急轉したかと思ふ間もなく、忽ち舞ひながら地上に墜落した。咄嗟にけたまひ推進機の音を立てながら、ローランドの一隻がサヴェジ中尉を攻撃した。烈しい而も短い格闘が起つた。ローランドは忽ち安定を失つて、先に墜落した僚友を追うて地上へ急いだ。

折柄、第二番目の英機は他の一隻のローランドと砲火を交へてゐた。そこにもお定りの操縦戦があつた。一尺でも一寸でも上空の位置を占めようと焦り合つた。機關銃が間斷なく銃弾の焰を吐き合つた。此のローランドも亦機體が怪しく搖れたかと思ふ一刹那、忽ち右翼を下にして木

の葉の如く空中を滑り落ちた。

此の一騎打の眞最中、味方の危急を看て取つた一隻のフォッカーは空中に呻りを立てながら急いで加勢に來た。二隻は餘りに急いだ爲あはや互に衝突しようとした。これがために操縦に時を費し、あはれにもローランドを見殺しにしてしまつた。

殿にゐたマツカビン少尉は此等の格闘の間に合はなかつた。「フォッカーに備へる爲に成るべく上空を飛べ」といふ教訓に餘りに忠實であつた彼は、八千呎の高度を保ちながら、味方と敵との烈しい戦を遙かの低空に見てゐた。そして自分も戦闘の渦中に翔け入らうとして機首を下げよう

とした時に、彼ははしなくも前方三千呎の上空に三隻のフォッカーが翼を連ねて飛翔しながら、サヴェジ中尉を狙つて今しも一文字に翔けおりようとしてゐるのに気がついた。

サヴェジ中尉も段々その危険を悟つたらしく、急角度を以て大きい圓を描きながら上昇に努めてゐた。折柄先頭のフォッカーが近づいたので、中尉は忽ち烈しい猛襲を之に加へた。敵機は見る間に機首を下にしてくる／＼と廻轉しながら落下した。

中尉は間もなく更に他の二機に猛襲された。これを避けようとして突然地上三千呎の低空まで急激な下降を試み

た。二隻のフォックカーはそれに續いた。さながら氣球から投下された石のやうに、眞直にしかも確實な急降を以てそれに續いた。マツカビン少尉はどうかしてサヴェジ中尉の危急を救ひたいと思つた。が、その戦闘區域に入るまでには三千呎に近い垂直の降下を試みねばならなかつた。彼は到底間に合ふまいと思ひながらも、機首を逆様にして驀地に降下した。二隻のフォックカーの機上にある機關銃は、烈しい銃火を間斷なく吐いた。中にも先頭に立つてゐるフォックカーは、中尉の機の頭上を掠めつゝ、中尉目がけてニッケル製の小さい投槍を幾十本となく投附けた。その一本は正しく中尉に命中した。かくて中尉は全然操縦の

能力を失ひ機は怪しく揺れつゝ、機首を逆さまにして地上に急いだ。

後でわかつた事だが、サヴェジ中尉を斃したフォックカーの操縦者は驍名西部戦線を壓してゐたインメルマン大尉であつた。彼は今日も亦垂直に落下しながら機關銃の銃弾を以て敵機を縫ふといふ放れ業をやつたのであつた。が、流石のインメルマンも、敵を斃した嬉しさに氣を取られて、他の敵機が間近く自分の背後に迫つてゐた事に全く氣が附かなかつた。

マツカビン少尉はサヴェジ中尉を斃したフォックカーの背後に迫つてゐた。彼はフォックカーの機關銃は前方の敵を

打つやうにのみ固定されてゐるために、背後の敵を射撃しようとするには機體そのものを廻轉させなければならぬといふ缺陷があることを心得てゐた。彼はフォックカーの此の缺陷を唯一の頼りとして烈しく敵機に迫つたのであつた。(心の王國)

一七 空中戦 その三

歐洲大戰の空中戦史に於て最も記念すべき時が刻々に迫つて來た。兩機はもう二百呎とは隔てゝゐなかつた。マツカビン少尉の機に同乗してゐる偵察將校は突如として機關銃の火蓋を切つた。インメルマンは明かに狼狽した。

彼は左に急廻轉を試みた。マツカビンも直ちに同じ方向に廻轉して再び敵機の背後に出た。インメルマンは機首を敵機に向けようとして幾度も狂的の圓舞を試みた。マツカビンはその度に巧妙な操縦によつて敵機の背後に出た。最初の不利な位置がインメルマンに飽くまでも祟つた。英機の機關銃彈は絶間なく空中の英雄を見舞つた。それは三十秒にも足らぬ短い格闘であつた。インメルマンは最後の手段として急激な廻轉を試みた。その途端に一彈が彼の身體の急所を貫いたと見え、機は忽ち安定を失つて二三回横轉し、石塊の如く垂直に地上に墜落するや否や青い焰を吐いて燃え上つた。

マツカビンは初陣の功名に揚々として低空を一周した。其處は味方の陣地内であつた。落下した敵機の周圍には味方の兵士が蟻の如く集つてゐるのが見えた。忽ち地上から大きな喝采が湧上つた。兵士は悉く彼を見上げながら手巾を打振つてゐる。彼は二回ばかり喝采に答へて波狀飛行を試みた末、根據地へと急いだ。彼は何故に自分が地上の兵士達からこれほどまで喝采を受けるのであらうかと疑つた。インメルマンを斃した事などは彼の夢にも思ひ及ばぬ所であつた。彼が根據地に近づくと、戦線からの電話で彼の大なる勳功を知悉してゐた同僚の飛行家達は悉く營舎の中から駆け

つけて來た。眞先に立つてゐた司令官の少將は、彼が着陸するや否や直ちに走りよつて強い握手を彼に與へた。そして「おめでたう、ソムの英雄マツカビン少尉よ。」と云つた。マツカビンは煙に捲かれたやうに何と答へてよいかわからなかつた。すると司令官の傍にゐた副官は、「君は到頭あの男をやつつけたのだ。なに、あの男と云へばインメルマンに定つてゐるではないか。」と云ひながらマツカビンの肩を叩いた。同僚の飛行家達は悉く彼を取巻いて喝采した。皆は恐ろしく昂奮してゐた。彼は手の痛くなるまで彼等から握手を強ひられた。そして自分の成し遂げた思ひがけなき奇

蹟に茫然としてゐた。

インメルマンの死。それは英軍の飛行隊に取つて何といふ大きな福音であつただらう。今までフォツカーの無氣味な機體から受けてゐた壓迫が今日こそは晴々と取除かれたやうに思つた。それは飛行將校の何人に取つても大きな歡びに相違なかつた。

一人が國歌を口ずさみ始めると皆は一齊に之に和した。彼等は手を舉げ足を踏鳴らしながら、そこに大なる歡喜の渦卷を作つてゐた。

誰も皆その親友の一人か二人かをインメルマンの爲に失はしめられたといふ苦い恨を持つてゐた。そのインメル



マンが當然な讐を報いられたといふ満足と、インメルマンがもう此の世に存在しなくなつた爲、逆落しの猛襲から絶對に免れることが出来るといふ安心とが、彼等の歡びを二重のものにした。

國歌が一しきり歌ひ終わられると、彼等はマルセーユを歌ひ始めた。無邪氣な青年飛行家達は有頂天になつて踊り狂つてゐた。

折柄、一臺の自動車は軍司令部の所在地なるアルトアの方面から全速力を以て駆けつけて來た。そしてその自動車から現れた副官のマークをつけた青年將校は、一の紙片を飛行隊長に交付した。

飛行隊長はそれを受取つて、微笑を含みながら一讀した。そして直ちに其處に在合せの臺に上つて、

「諸君。只今軍司令官からの祝辭が到着しました。」

と叫んだ。耳を劈くやうな拍手がそれに應へた。

「本官はマツカビン少尉の赫々たる武勳に對して絶大な祝意を表明す。本官はマツカビン少尉に對して直ちにヴィクトリヤ十字勳章を授與あるべきやう奏請しおけり。本官は尙インメルマン大尉の遺體に對して、貴隊が同大尉の武名と紳士的態度とに對する敬意を表せんがため軍葬の禮を用ひんことを希望す。」

讀み了へた飛行隊長の面には明かに或感激が漂うてゐた。

周囲は急に靜かになつた。今までの狂喜は忽ちその聲を潜めた。

彼等は餘りに勝利の歡びに浸り過ぎてゐた、恐るべき敵としてのインメルマンのみを考へ過ぎてゐた。彼等は軍司令官の此の武士的な寛活な提議を聽いて、強い敵愾心の變形としての歡喜が急に褪めかゝつて行くのを感じた。彼等は今名飛行家としてのインメルマン、敵ながら天晴の勇士としてのインメルマンを考へ始めた。すると、勇士の死に對する悲壯な心持、名飛行家の死を悼む人間本然の敬虔な心持、さうしたものが皆の心に段々にじみ出るのであつた。その上、敵の勇士の死を弔ふといふ事が、人間として

どんなに美しい事であるかといふことを彼等は考へ附いた。獨軍が隨一の名飛行家として誇つてゐた彼を物の見事に斃して、而も禮を厚うしてその遺骸を葬ることが、どんなに武士道的であり且紳士的であらうかと皆は考へた。彼等は急に嚴肅な心持になつた、センチメンタルな而もヘロイックな心持になつた。

「流石は軍司令官だ。何といふ武士的な、人道的な考だらう。さうだ、本當だ。あの男は死んでしまつたのだから、もう決して、我々の敵ではない。祖國の爲に生命を捧げた勇敢なる一個の軍人である。彼の死は彼と我々との敵對關係を永久に消滅せしめてゐるのだ。我々は彼に、

軍人として、勇士として十分な敬意を表せねばならない。さうだ。有志の諸君は彼の遺骸を收容するため直ちに出發してくれたまへ。」

飛行隊長の言葉は感激に充ちたハラーと拍手とによつて迎へられた。二臺の自動車は忽ち用意された。その中の一つには、敵の勇士のために、白木の柩が用意されてゐた。インメルマンの遺骸の收められた柩は、間もなく彼が戦死した場所から自動車に運ばれて飛行隊に到着した。柩の上には野生の草花で作られた花輪が幾つもくゝ飾られてあつた。

飛行機の格納庫のすぐ傍に此の村の教會堂があつた。會

堂の窓や天井は彈丸の破片で無慙にも破壊されてゐた。インメルマンの軍葬は今やこゝで行はれようとしてゐるのであつた。

柩は廣場の正面に設けられた祭壇に安置された。式は簡單で嚴肅であつた。老牧師は敬虔な聲を振り絞つて莊重な祈禱を捧げた。飛行隊の人々は任務に就いてゐるものの外は悉く參列した。彼等は各敬虔な心持で此の勇士の死を弔つた。ソムの戦線を縦横に荒しまはつた敵は今や全然戦闘力のない死骸として彼等の前に痛ましく置かれてゐる。もうフォツカーもない、機關銃の脅威もない、たゞ勇士の死といふ嚴肅な事實があるだけである。

軍樂隊は莊嚴な「悲みの曲」を吹奏し始めた。二三の士官はその曲に和して歌詞を唱へた。それが段々聲高く擴つていつた。彼等の心の裡の感情が此の曲にびつたりと合つた爲であらう。

夕日はフランドルの丘陵の彼方に眞紅の色を漂はしながら落ちかゝつてゐる。戦線の砲聲は何時の間にか言ひ合せたやうにとだえてしまつた。列席の將士の悲壯な心を搔亂すものはもう何もなかつた。彼等は總ての怨恨を忘れ、總ての敵愾心を地に擲ち、敵の勇士の爲に嚴肅な軍葬を執行した。それは人間が相害ひ合ふ戦争中に於て最も輝いた美しい瞬間に相違なかつた。(心の王國)

渡邊華山
名ハ登
三河國田原藩ノ
志士
天保十二年(三五
〇)歿
年四十九

一八 見よや春

渡邊華山

私十二歳の時、日本橋邊を通行仕候節、忘れも仕らず備前侯の御先供に當り、打擲を受け申候。當時子供ながらも大息して、備前侯は御歳大抵私と同年位なるに、大衆を率ゐて天下の大道を御横行成され、私は同じ人間にて、天分とは申しながら、その御先供に當りて打たるる事發憤に堪へず、今より何なりと志し候はゞ、如何なる儀にても出來申すべしと存じ、その頃高橋文平とて御祐筆相勤め申候者、私子供には候へども、日頃合口にて候間、此の者に相談に及び、爽鳩先生の門に入り、儒者

爽鳩先生
鷹見氏
田原藩ノ儒臣

に相成申すべしと決心仕候。然れども私親父二十年來の持病にて、一日も看病・按摩を缺き難く候間、朝夕退食の間、之を奉公同様に相心得、母の手助け仕候。その上兄弟皆幼少にて、七人ほどもこれあり、唯母の手一つにて病父・私共までその日を送り候事故、何分些かの餘裕も之なく候。貧窮餘りに甚だしく筆紙の盡す所にも之なく候へば、弟共は寺に奉公に出し、又は出家致させ、妹は御旗本へ奉公に遣はし申候。私十四歳許の冬、幼少の弟を板橋迄生別れに送り參り候時、ちらく降り來る雪の中を八九歳の弟が見も知らぬ荒男に連れられ、後を振向きく別れ候事、今に目

板橋
武藏國北豐島郡
板橋町
舊江戸四宿ノ一

熊谷宿
武藏國大里郡熊
谷町

前に髣髴仕候。右弟は定意と申し、後熊谷宿にて客死仕候。雷之助と申すは、始七歳の時青松寺と申す寺へ奉公に遣はし、後に御旗本屋敷へ養子に遣はし候。是



以て食物足らず、困窮の餘りの事に候へば、養子とは申しながら、山 嶺 邊 渡丸裸にて、親不知の様にて遣はし申候間、何

事に就きても先方里方を侮り候を心外に存じ、終に京都に出奔仕候。その後主人惜しき人物に存ぜられ、引戻され候處、是又數年辛苦仕候爲、彼の地にて病氣に罷

成歸府後間も無く終に相果て申候。右の次第故、妹兩人も、一人は遠方へ遣はし、一人は貧家へ罷越し、貧死仕候。これかれを考へ候へば、至貧至困無策無術の上に親父大病に相罹り候爲、斯くは兄弟過半非業同様の病死仕候次第に御座候。これにて當時困難至極の儀御察し下さるべく候。

私母近來迄夜中寝ね候に、蒲團と申すもの、夜具と申すもの引きかけ候を見及び申さず候。破れ疊の上にごろ寝仕り、冬は火燧にふせり申候。私親父大病故、高料の藥種、藥禮、日食の麵類等に事缺き、疊建具の外大抵質物に置盡し、猶親類共にも借盡し候へば、僅か南鐐一片

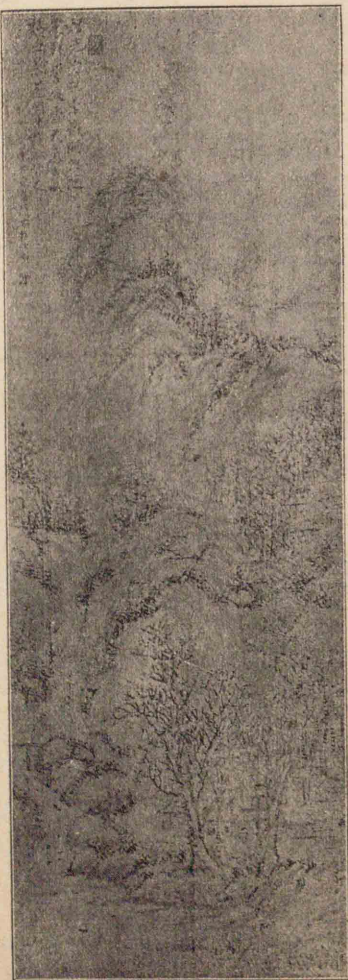
の儀にて、母方身内に當り候山伏の本所一つ目に住居候方へ、助右衛門と申す弟を背負ひ、雪中を冒して罷越し、夜に入り候うて歸宅仕候事之あり候。その節洗足の湯を沸し候とて衣服をこがし、大いに叱られ候儀今に覚え罷在候。之に依つて猶又高橋文平に相談仕候處、とても學問など致し儒者に相成候とて、金のとれ候儀は之なく、何よりも貧を救ふ道第一なりと申すにより、爽鳩先生を頼み、芝の白芝山と申す畫工へ入門仕候。此の時私十六歳に御座候。

然る處貧人にて附届行届かずとて、僅か二年にて師家より斷りを受け申候。私も此の時は如何仕るべきか

白芝山
白川芝山
名ハ景皓

金陵
金子氏
江戸ノ畫人
文化十四年(西曆
七)歿

と泣沈み候處、親父申候は、金陵事は大森勇三郎様の御家來に付、その旨申したらば憐み申すべしと申すにより、弟子と相成候處、金陵殊の外相憐み、少々は出來候様に相成候。さりながら、半紙を調へ候手段之なく候ま



蹟筆山嶽邊渡
(點墨遺山嶽邊渡)

ま、初午燈籠の畫を作り、百枚にて一貫の錢を取り、日本橋二丁目遠江屋、麴町天神たこやにて憐を乞ひ、多分に

文晁
谷氏
江戸ノ畫人
天保十二年(三五)
歿
年七十八

一齋
佐藤氏
徳川幕府ノ儒官
安政六年(五七)
歿
年八十八

相成候へば、右を以て紙筆を調へ申候。斯く仕候間にも學問は仕度存候へども、何分閑暇之なく候へば、冬に相成候へば朝七つ時に起出で、飯を焚き、その焚火にて讀書仕候。右は私を憐み畫道に於て種々取立てくれ候文晁が、毎朝起出で畫を認め候咄を承りて、發憤致候次第に御座候。右畫事少々宛内職と相成、稽古も出來候様相成候も、全く前爽鳩先生の恩澤に御座候。私廿六歳の正月元日、深く感ずる所これ有り、

見よや春、大地もとほす地蟲さへ。

と申す句仕候。之に依つて一齋へも申談じ、學問仕度候へども、何分寸暇なく候へば、夜中にても參り申すべ

きに付、御門制の儀然るべく御取成下され候様依頼候處、一齋よりその趣を書取り親父へ申遣はされ候趣之あり、即ち親父より村松六郎左衛門殿へ夜御門限の儀に就き願ひ出で候處、六郎左衛門殿より、儒者に無之ては御門制の儀仰出され難き旨御沙汰を傳へられ候に付、終に折角の志相挫け申候。熟、存じ候は上にして君に忠、下にして親に孝、皆是學問中より出で來り候儀に有之、殊に上へ忠と申す事は無學無術にては叶ひ難し、これよりは愈、以て繪事を専らとして、急にしては親の貧を助け、緩にして天下第一の畫工と相成申すべき一事に思を定め申候。〔華山全集〕

島崎藤村
名ハ春樹
文學者
詩人
明治五年生

一九 鶯

島崎藤村

さはれ空しきさへづりは、
雀の群にまかせてよ、
うたふをきけや、鶯の
すぎこし方の思出を。
はじめて谷を出でし時、
北風さむく霰降り、
うちに望はあふるれど、
行くへは雲に隠れてき、

露は緑の羽を閉ぢ、
霜は翅の花となる。
あしたに野邊の雪を噛み、
ゆふべに谷の水を飲む。
さむさに爪もこほりはて、
絶えなんとする度ごとに、
また新なる世にいでて、
くしきいのちに歸りけり。

あゝ、枯菊に枕して、
 冬のなげきを知らざらば、
 誰が身にとめん、吹く風に
 にほひ亂るゝ梅が香を。
 谷間の笹の葉を分けて、
 凍れる露を飲まざらば、
 誰が身にしめん、白雪の
 下に萌えたつ若草を。
 げに春の日ののどけさは、

暗くて過ぎし冬の日を
 思ひしのべる時にこそ、
 いや楽しくもあるべけれ。

梅のこぞめの花笠を
 かざしつ、酔ひつ、歌ひつゝ、
 さらば春風吹き来る
 香の國に飛びて遊ばん。(藤村詩集)

二〇 雪前雪後

幸田露伴

雨も好し、露も好し、霞も霽も天より降るものゝ面白からぬ

梅のこぞめの花笠

鶯の笠に縫ふて
 ふ梅の花折りて
 かざさん老隠る
 やと

幸田露伴
 名ハ成行
 文學者
 文學博士
 慶應三年(三五七)
 生

は無きが中に、雪はまた特にめでたし。降らんとして未だ降らず、灰色の雲の大空を蔽ひて風無き寒さに雀ふくらむ程は兎もあれ角もあれ、そと下す風に連れて、ちらく〜と降り出づる始より檐の玉水日に耀ふ光長閑に融けつくすまで、いづれかをかしからざらん。

まづ冬の雪の、粉の如く、球の如く、笹の葉に冴ゆる音立て、櫛の葉に堅き音立て、板庇にはいたく跳ね返りなどしつゝ、さらさらと降りたる、見るにも興あり、聞くにも面白し、又春の雪の大きく、軽らかに降りて、落つる間もなく色なき水の昔にかへる淡々しさもなつかしく、消えつゝも少しは積りて、茅葺の屋根に鹿子斑の夏の富士を見せ、松・梅・樅などの梢

には天華俄に落ちかゝるか、と疑はしむるも趣あり。されど降る最中の雪の見て美しきは、冬の末かけて春の初の頃、陽氣既に動きて陰氣猶いと盛なる時のことなり。寒さ甚だしからねば雪細かならず、暖かさ未だしければ雪は水めかずして恰も好く、且大きく且軽やかなるに、しかも一年の中最も降るべき折なれば、その霏々紛々として盛に下るに當つては、櫻花の春天に飜るが如く、蘆絮の秋風に漂ふが如く、一江の野渡には、對岸を虚無に封じて仙境の縹緲を疑欺き、半衢の陋街には、連屋を瓊瑤に包んで、蜃樓の巍峨を疑はしむ。鶴毛亂れ飛び、鷺毳飄り零つる景色、見る眼もあやに美しき限りなり。

馬をさへ
馬をさへ眺むる
雪のあしたかな
芭蕉

すべて降る時の眺には廣きところより狭きところ好し。玉屑珠塵いと清きことは清けれども、もと色を奪ひ光を障ふるものなれば、降りしきる真中は、遠きは全く見えずして廣きは却て狭くなり、近きは聊か霞みて狭きは却て廣くなり、大川よりは山間の溪、廣野よりは市中の園よろし。霽れての後こそ雪は目ざましけれ。塵埃拭ひ盡して鏡新に明かなる空の蒼々と朗かなるが下に、渣滓鍊り去つて銀曇なき地の皎々と白きが、見る眼もはゆく遙に開けたる、常の日はたゞ裾寒き風の枯草を吹くのみなる空野の取りどころ無きだに、面白くおもはる。「馬をさへ眺むる」と人の云ひたる旦、朝日の光いと花やかなるに、疎林に禽起つて飛ん

でまた還る、有りふれたる郊外のさまながらもよし。

西の京は金閣・銀閣・眞如堂・岡崎・東山・清水皆畫とすべし。梅尾・槇尾は見ねば知らぬぞ口惜しき。木曾の寢覺の床の、巖



雪の金閣寺

は鬼斧に任せて千古冷かに峙ち、潭は藍靛を湛へて一脈徐に流る、雪の日の凍れる寂しさに、翠蓋梢重く、壁の簷を戴ける松の

村立のあたり、姿をも見せて名をも知らぬ山の禽の餓を鳴きたるなんと、二十年の昔の余の胸にあざやかなり。

山王臺

麴町區ニアル小

丘

日枝神社ノアル

處

溜池

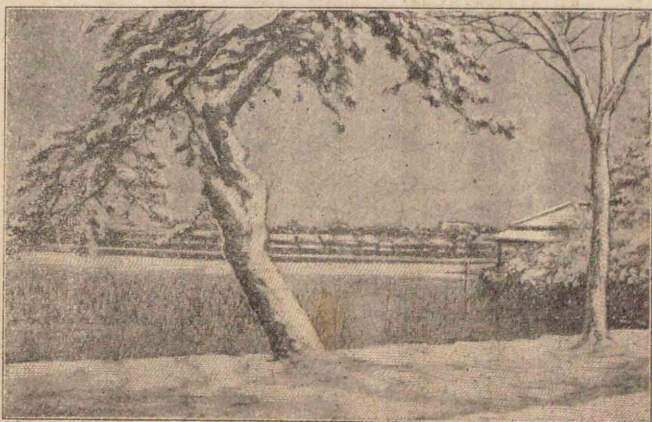
山王臺ノ東南麓

ニアツタガ今ハ

埋メラレテ宅地

ニナッタ

東の京は御溝の水おだやかに、浮寝の禽の夢も安けく、雪に
 閑かなる大御代の午、また比無く
 めでたし。山王臺今猶好からん
 が、溜池の有りし昔いたづらにな
 つかし。不忍の池一望千頃の景
 はいはずもあれ、石橋の小やかな
 るを渡つて湖心に至らんとすれ
 ば、敗荷の殘莖に一撮の白きもの
 を見たる、これも捨て難き風情あ
 り。暮れて猶暮れ難き雪の闇夜
 に、何をか物言ふ鴨のさゝめきを聞きたる、水に色無く、聲に



冬の不忍池

待乳山

隅田川ノ右岸淺

草公園ニ近イ小

丘

相生橋

深川區越中島カ

ラ京橋區新佃島

ニ渡シタ橋

中島

深川區越中島ノ

一名

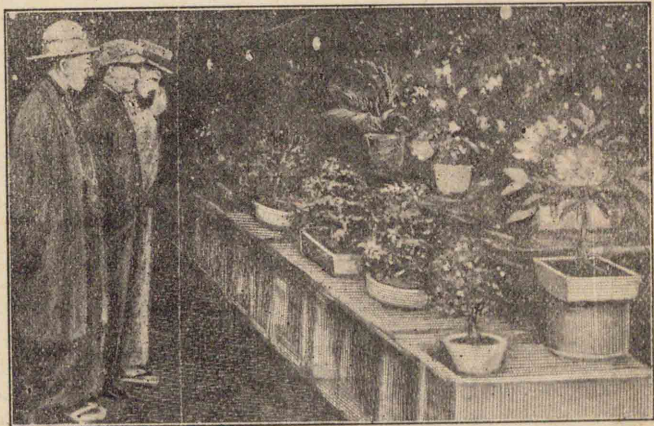
白さ有りとか云ふべき。隅田川は待乳山を望みたるも好
 し。山に舞臺あり、臺より望みたるも好し。一條の碧、四方
 の白、實に武藏野を分きて流るゝ川なりと稱ふべし。相生
 橋の橋長く、中島の島小なる、取出でて言ふべきにはあらね
 ども、南に涯無き海をすかして海鷗も雪に曇る渺茫たる景
 色を、欄干の玉を展べ樹立の鷺を宿したるに劃りて一幅の
 畫としたる、欣ぶべく、賞すべく、此處をこそ今の京には雪の
 見どころとすべけれ。(洗心錄)

二一 自然の愛好

藤岡作太郎

慈愛なる母の懷に養はれたる子は生涯その恩愛を忘れず。

日本の風土は國民の慈母なり。地味豊饒にして、河海に魚



店木植の夜の口縁

べし、都會の縁日に張りたる夜店には食品玩具などの多

貝の利多く、生活をして自由ならしむるが上に、優美温雅なる山川は常に臉上に愛を湛ふるが如し。接する者はこれに親しみ、親しむ者はこれを慕ふ。愛に迎へらるゝ者は愛を酬いざるを得ず。天然の大公園に棲む我が國民が、その一木一草をなつかしむは自然の情なる

かる中に、露を帯びたる植木の葉の翠、花の紅こそカンテラの光に映えてみづくしく鮮かなるを、中流以下の市民はあれこれと買求めて、座敷に飾り、庭に植込む。裏長屋の道具の据所もなき窓前にも稗蒔作りて、田舎の景色の面影を偲び、破れ鉢に唐芋を育て、やさしき野趣を嬉しむ。長火鉢の脇の福壽草は鏡餅に對して暖かげに、軒端に吊りたる忍草は風鈴の音と共に涼し。上下貴賤を通じて自然を愛好することかくの如きは他の國民にその匹ありや。我が國民は母の慈愛をのみ享けて、父の威嚴を知らず。自然の愛すべきを見て、畏るべきを思はず。野をも垣をも吹亂す二百十日の風も、野分の名にやさしく、峰も谷も一つに

恐しき猪も
 和歌こそなほを
 かしきものなれ
 あやしのしづ山
 がつのしわざも
 いひいづれば面
 白く恐ろしきお
 のしもふする
 の床といへばや
 さしくなりぬ

埋みてすさまじき冬の山里も深雪といへばみやびやかなり。「恐しき猪もふするの床と稱ふるにやさしく聞ゆ」など兼好がいへるは、我等が自然に對する此の傾向を説明せるなり。雨といへば照りつゞきたる夏などは嬉しけれど、一日の降も十日の照より飽きくするに、卯の花くたし時雨など、何れも趣ありて感ぜらる。

自然の愛はかくして表はるゝのみならず、その名を借りて屢、人事に用ふ。文學には源氏物語の卷の名に夕顔、末摘花、葵、神朝顔、胡蝶、螢、常夏、藤袴、若菜、柏木、鈴蟲、紅梅等あり。菓子に鶯餅、櫻餅、柏餅、萩の餅、紅梅焼、時雨など枚擧するに遑あらず。今の刻煙草の名にも福壽草、白梅、皐月、あやめ、萩、紅葉等

あり。古く獸肉を紅葉といひ、金貨を山吹に譬へたるも、やさしからずや。

我が國民は自然を愛賞する餘り、又よく之を尊重せり。尊重するものには悦んで服従す。彼等はみだりに人工の手を加へずして、自然の儘に自然を仰ぐ。此の服従を以て屈伏といふ勿れ。悦服は自動的なり、屈伏は他動的なり。屈伏するものは不平なる奴隸が氣儘なる主人に對するが如く、悦服するものは從順なる兒孫が寛大なる家長を見るが如し。任意的なるものは毫も抑壓の念をその間に感ぜず、他の意を以て喜んで己の意とす。花に對する我等の趣味が如何に西洋人に異なるかを見よ。薔薇は枝ながら幹な

がらの姿の美はしきにあらざ、花一輪の色の艶に、香の芳しきなり。櫻は一枝の趣を賞するより、峰に互り川に沿ひて、雲とたなびきたる態の目ざましきなり。花瓶に挿す時、西洋人は花ばかりをちぎりて手毬の如くし、日本人は葉も枝もその儘に、願はくはこれに置く朝露をも落さざらん。とす。一は枝を撓めて花輪を作り、花瓣を卓上にふり撒きて歡を助くるに、一は床上の盆石盆栽に自然の大景を方寸に寫す。彼は色彩の變化を喜ぶに、此は形態の多趣なるを賞すること、恰も油繪と水墨畫との異なるが如し。同じ菊を見るも彼は色を重んじ、此は形を主とすといふ。西洋の草花のチウリップ、ヒヤシンスなど、その葉に何の趣もなくしてその

花の妖艶なるは、寧ろ我等の眼に毒々しと感ぜらる。秋の野の女郎花、尾花、その花に何の美しきことかある。されど、あるかなきかの黄花を捧げて、なほたよくと下蔭の蟲の音にもゆらぐ様、ますほの色はやがて白くほゞけて、露に濡れ風に靡く趣は、我が胸にしみて忘れられず。日本人が花を愛するはその外形にあらず、賦色にあらずして、その風情にあり、直に自然の懷にわけ入つて、その眞意を握るにあり。かくしてこそ自然を愛し、自然を尊ぶなれ。自然に親しむことの深きはこれ日本國民の特性なり。(國文學史講話)

二三 故郷の花

薩摩守忠度

平忠度

壽永三年(八四四)

一谷ニ戦死シタ

年四十一

俊成卿

藤原俊成

元久元年(八六四)

薨

年九十一

薩摩守忠度は、いづくよりか歸られたりけん、侍五騎、童一人、わが身ともに、混甲七騎取つて返し、五條三位俊成卿の許におはして見給へば、門戸を閉ぢて開かず。忠度と名のり給へば、落人歸り來れりとして門の内騒ぎ合へり。薩摩守急ぎ馬より飛んで下り、自ら高らかに申されけるは、これは三位殿に申すべきことあつて忠度が参りて候。假令門はあけられずとも、この際まで立寄り給へ。申すべきことの候と申されたりければ、俊成卿その人ならば苦しかるまじ、あけて入れ申せ。とて、門をあけて對面ありけり。事の體何となうものあはれなり。

薩摩守申されけるは、先年申し承つてより後は、ゆめく疎

略を存ぜずとは申しながら、この二三箇年は京都の騷、國々の亂出で來、剩へ當家の身の上に罷成りて候へば、常に参り寄ることも候はず。君既に京都を出でさせ給ひぬ。一門の運命今日ははや盡きはて候。それにつき候ひては、撰集の御沙汰あるべき由承つて候ひし程に、生涯の面目に、一首なりとも御恩を蒙らんと存じ候ひつるに、かゝる世の亂出で來てその沙汰なく候條、たゞ一身の歎と存じ候。この後、世しづまつて撰集の御沙汰候は、これに候卷物の中にさりぬべき歌候は、一首なりとも御恩を蒙つて、草の蔭にても嬉しと存じ候は、遠き御守とこそなりまゐらせ候はずれ。とて、日比詠み置かれたる歌どもの中に、秀歌とおぼし

きを百餘首書きあつめられたりける巻物を、今はとて打立
 たれける時、これを取つて持たれたりけるを、鎧の引合せよ
 り取出でて俊成卿に奉らる。
 三位之を開きて見給ひて、かゝる忘形見どもを賜はり候上
 は、ゆめ／＼疎略を存ずまじう候。さても只今の御渡りこ
 そ情も深う哀も殊に勝れて、感涙抑へ難うこそ候へ。と宣へ
 ば、薩摩守屍を野山に曝さば曝せ、浮名を西海の海に流さば
 流せ、今は憂世に思ひおく事なし。さらば暇申して、とて馬
 に打乗り、兜の緒をしめて西をさしてぞ歩ませ給ふ。三位
 後を遙に見送つて立たれたれば、忠度の聲と覺しくて、前途
 程遠し、思を雁山の夕べの雲に馳すと高らかに口ずさみ給

前途程遠し
 前途程遠し思
 於雁山之暮雲、
 後會期遙驚、
 於鴻臚之曉淚。

へば、俊成卿いと哀に覺えて、涙を抑へて入り給ひぬ。
 その後、世静まりて千載集を撰ぜられけるに、忠度のありし
 有様、いひおきし言の葉、今更思ひ出でてあはれなりけり。
 件の巻物の中にさりぬべき歌いくらもありけれども、その
 身勅勘の人なれば、名字をばあらはされず、故郷花といふ題
 にて詠まれたりける歌一首ぞ、よみ人しらずと入れられた
 る。

さゝふみや志賀此都は荒きにしを、

むろしながら乃山ざくらかふ。

その身朝敵となりぬる上は子細に及ばずといひながら、う
 らめしかりしことゞもなり。(平家物語)

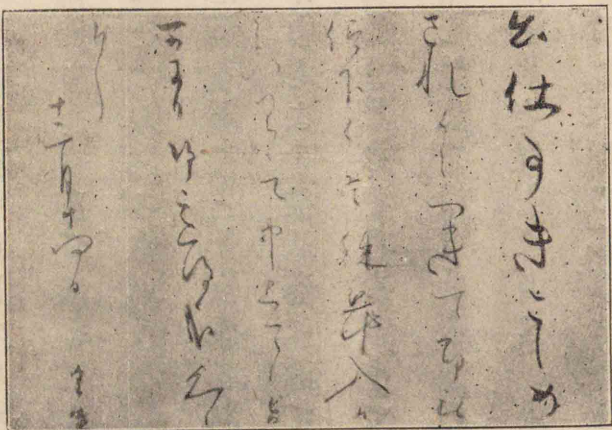
二三 平重盛論その一

高山樗牛

小松内府重盛は、げに智仁勇兼備の大臣なりき。此の點より見れば、彼は平家第一等の人物といふべかりき。唯理に明かなるに較ぶれば、その意は寧ろ弱く、その情は寧ろ脆かりき。彼がその材能を發揮して遺憾なからんが爲には、少くとも更に數層の強烈なる意志を要したりき。加ふるに早く佛説に歸依して現世の無常を觀ぜしが爲に、奉公の大義に於て聊か缺くる所あるを免れず。此の人にして此の弊あり、洵に惜むべし。

四十三年の齡は重盛に於て決して短きものにあらざりき。

平家の興るや彼實にその樞軸たり、平家の榮ゆるや彼實に



(實盛徵史) 蹟筆 重盛平

その柱石たり。彼の一生は、その父入道と共に平家史の大半を語るものなりき。清盛心剛に情強く、眞に一世の豪傑なりしかど、その事をなすに當りて重盛に待たざること殆ど一度だにもあらざりき。戰陣に臨みては危きを矢石の間に救ひ、帷幄に參しては籌を百里の外に運らし、世靜まれば儀禮彼に於て

筆蹟

出仕事きこしめ
され候につきて
即被仰下候條殊
畏入候まいり候
て申上べく候旨
可有御意得候哉
恐々謹言
十二月十四日
重盛

備り、道衰ふれば大義彼によりて正されき。彼は嘗に平家一門の柱石たりしのみならず又世道の儀表たり、君國の宗師たりき。藤氏衰へてより世に人傑なし、而して重盛は實にその人傑の第一人なりき。惡源太義平と紫宸殿の階下に鬪ひし重盛は如何に勇ましかりしよ。彼、武藝に於て人後に落つるものにあらざりき。信賴、平家の不在を窺うて亂を起すや、熊野參詣の途上にありし清盛をはじめ平家の一族は、寧ろ西國に走りて再舉を圖らんと欲したりき。かの時、平家にして直に都に歸らざりせば、天下の事ほゞ知るべきのみ。此の時に當りて衆論を排して入京を主張し、大義名分を唱へて士氣を鼓舞した

るは實に重盛なりき。されば平治の戦功を論ずれば、當に功一級たるべきもの實に重盛なり。唯この一勝あり、平家の勢はさながら蛟龍の雲に乗じたるが如きものありき。されば此の氣運を致したる重盛こそは正しく一門興隆の開山とも稱すべけれ。

世は既に平家の世となりて、四海の權柄入道が掌裏にあり。重盛が天分益、その高きを加へぬ。今や彼は一武人に非ずして朝廷の輔弼たり。公私内外の間に處して君國の大事を辨ずべきもの、實に彼を措いてその人なかりき。その男資盛、攝政の儀仗を冒して辱められし時、入道は大いに怒りて暴慢の復讎を試みしが、重盛は深く慚愧し、資盛を放つて

攝政
藤原基房
寛喜二年(八九〇)
薨
年八十七

世に謝しき。鹿が谷の事ありて成親の斬られんとせし時、一國の重臣、私門の成敗に任ずべからざるを説破せしも重盛なりき。事延いて法皇の幽閉に及ばんとするや、四恩の妙理を引いて君臣の大義を訓へしもの亦重盛なりき。入道が我執の一念は幾度か重盛の爲に沮まれて、君國の事纔に安きを得たり。忠孝の兩全を期し、公私の事無きを謀れる重盛が心事の如何ばかり苦しかりしかは、察するに餘りありといふべし。あはれ入道が榮華は壯大極りなかりしが、その裏面にはその愛子を犠牲とせる慘澹たる悲劇ありき。重盛年なほ壯にして夙に厭世の心を動かし、早く佛説に歸依して來世を希求せしもの、その際遇の自ら然らしめ

しところ。その情や深く憐むべしとせん。

二四 平重盛論 その二

高山樗牛

然れども此の佛説に歸依せる事は、重盛にとりては寧ろ恨事なりきと謂はざるを得ず。彼身は一國の大臣として奉公の大義を辨ずるもの、宜しく忠を勵み道を盡し、斃れて後已むべきなり。洵に忠孝兩全し難くして、骨肉の私情さすがに絶ち易からざれど、事體の大小、云爲の先後、必ずしも辨じ難からず。何ぞ妄に一身の安慰を冥々の後にのみ求めべしとせん。此の難關に當りて能く功を擧げてこそ眞に人傑といふべきなれ。重盛たるもの輕々しく事局を回避

して自ら全うすべからざりしなり。彼の熊野に禱る詞を見るに、要は一門の榮華永きを保たじ、寧ろ死してその末路に遭遇せざらんと謂ふにあり。何ぞその願の私情に拘ることの多くして公義に盡すことの少きや。彼の一身は公私内外の望の由つて繋る所、君は以て泰きを得、父は以て正しきを得、洵に一門の柱石、一家の儀表たり。彼死せば入道が暴横はさながら、悍馬の御に離れしが如けん。帝座の危きや知るべきなり。彼死せば一家の望立ちどころに世に離るべし。一旦事あらん日、誰か能く擁護の任に當るべき。一門の危きや亦知るべきなり。重盛已に一身を以てこの大局を保持し、居然としてその重きに任ず、何ぞ區々の私情

のために逃避すべけんや。重盛その曠世の聰明を以てして、如何ぞかばかりの理義を辨ぜざらん。辨じて而してなほ之を敢へてせざるものは、その佛説に歸依したるの致すところと謂はざるべからず。是、重盛にとりて一大恨事に非ずして何ぞ。

世の忠孝の龜鑑として重盛を論ずるものは、吾人の同意する能はざるところなり。その情は誠に憐むべし、その行は則ち大いに未だし。殊に平家盛衰の側より見れば、自ら求めてその身を殺したるは、則ち自ら求めてその家を亡ぼしたるに等し。入道心剛なりと雖も、齡已に耳順を越ゆ。その身後に於て誰か一門統率の任に當るべき。凡庸宗盛の

耳順
六十而耳順

輩の素より爲すなきこと、重盛の明を待つて知らざるなり。加ふるに諸國の源氏外に機を窺ふあり、院宣一たび下らば天下の事俄に知り難し。重盛此の危機に際して何ぞ自ら重んぜざりしか。文覺の頼朝に説ける言に曰く、平家には小松の大臣殿こそ心も剛に謀も勝れておはせしか。平家の運命茲に窮れるか、去年の八月薨去せられぬ。今は何の憚るところぞ。御邊一たび起つて塵かば、天下靡然として従はんと。平家の存亡一に重盛の上に懸りしこと亦以て想ふべきにあらずや。あはれ、世は如何にもなりなん、唯力を盡し忠を勵みてもなほ及ばざらん時、かねて亡き身のせんすべなからめや。さるを君父を捨て、門下を去り、偏に一

身の安慰を未來に祈願せるこそ心得ね。吾人こゝに至りて遂に重盛を辯護する辭を知らざるなり。(樗牛全集)

二五 皇國の姿

八田知紀
薩摩ノ歌人
明治六年歿
年七十五

いゝこゝろびかきよもすこゝろ
ハ田知紀

橋曙覽
福井ノ歌人
明治元年歿
年五十七

水やこゝろみすこゝろ
橋 曙 覽
天をけいこし
勅とまひけが
かこみまわれ

小澤蘆庵
京都ノ歌人
享和元年(一八一六)
歿
年七十九

松平定信
白河城主
文政十二年(一八三〇)
卒
年七十二

僧契沖
大阪ノ國學者
元祿十四年(一七〇三)
歿
年六十二

久あはれいふなまわきを
わらわん
けつらんさまの
ゆきりげと
あ

垣大はあつうの
ごうけつら
れ
まともや
らぬご
らうけ

われをう
んはさ
こひ
まを
し
ひと
を
ほ
く
あ
ご
を
ほ
ふ

田安宗武

將軍吉宗ノ第三
子
明和八年(一七六三)
卒
年五十七

清水濱臣
江戸ノ國學者
文政七年(一八二四)
歿
年四十九

大西祝
哲學者
文學博士
京都帝國大學文
科大學教授
明治三十三年卒
年三十七

ちがうす
ら友よ
びのけ
あそぶ
なり
なご
や人の
ひとり
のむ

まも
まわ
きも
うけ
んさ
はの
ま
をす
むる
け
あ
あ

世界の文明は之を全體より觀察すれば、年を逐うて進歩し

二六 國民の抱負

二六 國民の抱負

大西 祝

發展す。而して各國歴史の河流は遲速の別こそあれ遂には世界歴史といふ一大海に朝宗する運命を有するなり。唯その世界の文明に力を致すに於て、各國必ずしもその趣を一にせず。往昔猶太人は地上に神の王國を建つるを以てその覺悟とし、希臘人は文藝學術を傳播するを以てその天職とせり。羅馬は世界の帝王を以て自ら任じ、蠻夷の襲撃を受くる曉に於て、なほ世界の女王たる位置を保ち、遂に政權を剝奪せらるゝに及んでは、法王政を建て、精神的帝王となり、以て世界に君臨したり。近世の歐米人を見るに、英人は己が運命は海上權を掌握し、遠隔の地に植民をなすにありと信じ、米人はその國土を以てあらゆる方面に自主

自由を發達せしむる舞臺となし、獨人は科學及び政治の上より世界に一大寄與をなすを以てその抱負とし、佛人は人間的の思想感情を世界に弘むるを以てその任務とするが如し。

日本は世界の文明に對し如何なる寄與をなすべきか。日本國民は世界に對して如何なる抱負を有すべきか。これ今日の識者先覺が深思熟慮すべき一大問題たり。世界の抱負は日本人をして如何なる事を世界に宣傳せしめんとするか。大勢は無聲無形なり。識者先覺は大勢を悟了し、これをして聲あらしめ、形あらしめざるべからず。もし偉大なる先覺ありて、この大勢が言はんと欲して言ふ能はざ

るところを國民に宣傳するあらんか、國民の心は譬へば塞かれたる水の堰を開かれたる如く、滔々たる大河となりてその進むべき所に流れ行かん。我が輩は一日千秋の思をなして、日本國人將來の覺悟抱負を宣傳する大指導者の出でんことを希望して已む能はざるなり。

然れども、我が輩姑く明治維新時代に立返り、當時の經世憂國の士が自ら任じたる所を見るときは、その中猶わが國民が今日の覺悟として可なるものあるを發見せずんばあらず。彼等は、大義名分を四海に布くを以て日本の抱負とし、權謀術數を去り、至誠世界に立つを以て日本の覺悟とし、一視同仁に天地の大道を體し、天に代りて世界の横道を説破

し、討伐し、剿誅し、萬國安全の道を示すを以て日本の天職と考へたるなり。その元氣の壯なる、人をして覺えず奮起せしむるものあり。この元氣とこの覺悟とありしが故に、維新の改革は成就して、鎖港攘夷の陋見は打破せられたるなり。維新以來日本が駸々として進歩し、今日の如く多少の力量を有する國となりしは、實にこの元氣と覺悟とありしが故なり。

我が輩は日本人に種々の缺點あるを知る、日本人は猶幾分の修練と困難とを経過せざれば決して大國民となる能はざるを知る。然れども、世界中に於て大義名分の爲に熱狂し、忠誠の爲に一身を抛つ事土芥も啻ならざる民ありとせ

身を殺して
子曰志士仁人
無求生以害
仁、有殺身以
成仁。

ば、何人もまづ指を日本國民に屈せざるを得ざるべし。至誠の極或は輕率の舉動に出で、大事を誤る同胞なきを必せずと雖も、身を殺して仁を成すに於て極めて敏速に、死して悔なきもの、日本人のごときは世界國民中多くあらざる所なり。日本人は道德義務の念に沸騰する國民なりといふとも、誰か然らずといふものあらん。果して然らば、日本が世界の文明に對して寄與すべき最大なるものは道德上の教訓にあらざるか。日本は道德上に於て世界の師表となり、世界より私欲の氾濫を排除する一大任務を有し居るにはあらざるか。日本帝國が開關以來絶海に孤立し、世界の腐敗の外に超越し、清潔美麗なる風土山川に薰化せられ、君

臣父子夫婦朋友の道正しく、大體上よりいへば殆ど理想的國家を經營し來りたるもの、他日大いに世界の腐敗を掃蕩するがためにはあらざるか。天下の微弱を扶持誘掖し、驕傲無禮を掣肘壓倒し、世界の私心を根絶し、道德上の帝王となりて世界に君臨するは、日本がその特質上より世界の文明に對してなすべき最大寄與にあらざるか。我が輩は日本が天地大道の化身となりて萬國民を警醒する大抱負大覺悟をなすべき時機の到來せるを見て、欣喜措く能はざるものなり。(天西博士全集)

三
子
乙
塚
田



広島大学図書

2000302014

